
その悪を背負う者は.....

目目連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その悪を背負う者は……………

【Nコード】

N9290P

【作者名】

目目連

【あらすじ】

悪逆無道、悪鬼羅刹、極悪非道、悪漢無頼、外道に堕ちたと言われた男。

そんな男が乱世を行く……………。

1話 悪を背負う男（前書き）

どうも、目目連です。

懲りもせず、またまた投稿しちゃいました。

どうぞ、温かい目で見守っていただければ幸いです。

1話 悪を背負う男

「全く。黄祖の奴め、余計なことをしてくれたな……………」

男は玉座に座りながら、そう毒づく。

「だが、この程度で死ぬなんて、孫堅もその程度であった、と言っ
ことか……………。下らぬ」

男は玉座から乱暴に立ち上がるとズカズカと歩いていく。

その背中には“悪”の一字が禍々しく縫い付けてあった。

時は過ぎていき、ここは刑州、袁術の屋敷。

孫家を吸収し、一気に刑州の支配者となった袁術。

そして、その袁術の客将となることを余儀なくされた孫策。

それに加えて各軍師たる張勳、周瑜を合わせた四人が玉座の間に居た。

「それで、今日は何の用なのかしら？」

不機嫌さを隠しもせず、孫策は袁術に対して言う。

「うははは、苦しゅうない」

そしていつも通りの能天気な袁術に青筋が深くなる孫策。

「今日ですねー、南の方に何やら賊が出たみたいなんですー。ちょっと行ってすぱーって片付けちゃってきて下さーい」

袁術の隣に控えた張勳が人をおちよくなるような口調で言う。

これが素であるのか？振りなのか？

「賊とは……。数はどれくらいなのだ？」

周瑜が冷静に情報を聞き出す。

「ええと……。確か五千くらいですかね」

「五千？ウチの兵はその半分ぐらいだぞ」

「それがどうしたのかえ？」

倍ある敵に当たれとそう言っている袁術に周瑜が異議を申し立てる。

「大丈夫ですよー。孫策さん所の兵隊さんは優秀ですから」

「いくら優秀でもね、倍の相手に当たれば損害は被るのよ」

確実に嫌がらせなのだろう。

「そうじゃ！なら丁度良いものがあるぞ！」

ニヤリといかにも悪巧みを思い付いた顔の袁術。

「……嫌な予感しかしないわね」

とそこへ乱暴に扉が開けられ一人の男が入ってきた。

「邪魔するぞお」

その男は無礼に無遠慮に玉座の間に入ってきた。

「おお、丁度良いところに来たの」

「ああん？何がだ……？」

と男はぐるりと部屋を見渡し、孫策の所で目が止まる。

その鋭い、鷹のような目で孫策を見る。

「なんだ、誰かと思えば孫堅の娘じゃねえか。そついや今は袁術の客将なんかに成り下がってるって聞いたな」

カッカッカツと男は笑う。

「母様を知っているの？」

「ああん、餓鬼ん頃に会ったが覚えてねえか？まあ、覚えてるわけねえよな」

カッカッカツと笑う男。

豪気というか、無骨者といった風合いの男だ。

「俺は 劉表だ」

『 ツ！？』

孫策と周瑜が顔色を変える。

「お前が母様をおおー!!」

「しえ、雪蓮、落ち着け!」

抜刀しようとした孫策を周瑜が止めに入る。

流石、軍師。どんな場合においても冷静であった。城内において抜刀はご法度である。それが例え親の仇であっても……………。

打ち首はなくとも、今よりも厳しい状況になるのは間違いない。

そしたら孫呉の復興が更に遠退く事となる。

「カツカツカツ。血気盛んは母譲りか?大いに結構だ、小娘。だが俺は今、忙しいんでな後にしろ」

と男 劉表は袁術に向く。

「ほらよ、兵の再編成の報告書だ。読まずにさっさと印を押しとけ、袁術」

まるで投げ捨てるかのように報告書を渡す劉表。

「ござう、劉表さん。美羽様は貴方の主なんですよー?ちゃんと敬いなさーい」

「へいへい、袁術様々。それじゃ、俺は自分んところに戻るぜ」

「ちょっと待つのじゃ、劉表」

劉表が部屋を出ていこうとすると袁術がそれを止める。

「ああん？」

「ぴいー!？」

それに凄んで返すと袁術がブルブルと震える。

「チツ。……………で何なんだ？」

舌打ちをして、凄んだ目を戻す。鋭い目は変わりはないが……………。

「そ、そのな……………七乃」

凄んだことが相当きている袁術は張勳へ助けを求めろ。

「はい」。実は南の賊退治を孫策さんたちと共に行って欲しいのですよ」

『はあ!？』

孫策と劉表の声が被る。

「おいおい、それは何の冗談だ？」

「冗談?違いますよー、命令です」

呆れたように頭を押さえる劉表に黒い笑顔で答える張勳。

「劉表さんの所の兵隊さんは何人いるんですか？」

「あぁん？……千か二千だな。急拵えでいいなら、もう千だ」

「ほら、これで大丈夫ですよ、周瑜さん」

と今度は周瑜へ笑顔を向ける。もちろん黒い方である。

「カツ。随分とイカした命令だな」

「うははは、もっと褒めてもよいぞ」

ハッ、と鼻で笑い劉表は出ていった。

「ちょっと待ちなさい」

「……はぁ。なんだ、まだ用があんのか、嬢ちゃん？俺は忙しいって言わなかったか？」

心底嫌そうな顔を隠そうともせず、孫策に振り返る劉表。

「なんでアンタが袁術の元にいるのよ」

これまた孫策も不機嫌そうな、いや、殺気を隠そうとしない。

「ああん？なんでもなんで、理由なんてねえよ。ただそうだったっただけだ」

「それはおかしな話だな。孫堅様とやり合ったお主が袁術の配下に只で成り下がるとは思えないが？」

「いや、それは買い被りだな。俺はそんな優秀じゃねえよ。基本的には長いものに巻かれる主義の腰抜けだぜ？」

カツカツカツと笑い歩いていく劉表。

その後ろ姿には“悪”の一字が縫い付けられていた。

2話 劉表の戦い方

劉表という男を表す言葉は一言、「悪」だろう。

悪逆無道、悪鬼羅刹、極悪非道、悪漢無頼。

それら全てが当てはまると言っても過言ではなく、そして劉表自体それを肯定している節がある。

その素行は乱暴で、言葉には常に悪意と棘がある。

そしてその目付きの悪さも相まって、昔治めていた邑では彼が通るだけで人が居なくなると真しやかに囁かれていた。

そして最も彼の印象を固定させるのはその戦い方、いや、彼自ら戦うことは稀であり、主には指揮であるが、それでも彼の悪行は大陸中に知るものである。

“悪”の一字があしらわれた外套に髑髏むくむくを模した煙管を右手に、そして左手には馬鞭ばへんを持ち、簡易の椅子に深々と座り、足を組み戦場を見て笑っているのだ。

彼の部隊の異様さも彼に劣らず、異様であつた。

それは全員が顔を覆い隠す覆面を被っていた。それは誰一人例外なく、誰一人区別も出来ない。

戦場で顔を晒しているのは劉表ただ一人だつた。

「カッカッカッ」

戦場に劉表の笑いが響く。

戦況は当然の如く、孫策・劉表軍の圧勝状態であつた。

「それじゃ、だめ押しに増援といきますか」

ニヤリと悪どく笑う劉表。

「劉表殿、これ以上の戦いは無用だと思つが？」

とそこに周瑜が増援しようとした劉表に言う。

「ああん？無用？知らねえよ、そんなこと」

「知らないって！？無用に兵を傷つけるつもりなの、アンタは！？」

劉表の言葉に孫策が喰いかかる。

「それが何だつてんだ？」

それだけ言つて劉表は自分の部隊に向かう。

「テメエらはなんだ！？」

劉表は自分の部隊の前で声を張り上げる。

全員が同じ覆面を被り、他者との区別がつかない。

「テメエらは狗だ！獣だ！人を殺すだけの畜生だ！」

劉表は馬鞭を振るい、兵の前で叫ぶ。

「人を殺すだけの畜生に生きる価値などありはしない！ならばせめてこの戦いで獣同士殺し合い死んでこい！俺のためにその命散らしてこい！もし生き残ろうとするのならばその時は俺直々に引導を渡してやる！」

ビュンと馬鞭が風を切る。

「さあ、逝け！我が獣の共！その醜い命せめて華々しく散らしてこい！」

ピシッと賊のいる方を指す。

『ウオオオオオオオ』

「喰らい尽くせ！捕食者気取りのやつらに自分らが獲物だと思いきや知らせろ！死体で山を築け！血で池を造れ！悲鳴で大気を震わせる！ここは戦場に非ず！ここは悪鬼羅刹、魑魅魍魎の跳梁跋扈する地獄であると知らしめる！」

尚も奮起する劉表兵たち。

「我が名は劉景升！我が名において命じる！蹂躪せよ、我が獣共！」

そして勝敗の着いた戦いは一方的な蹂躪と化した。

「まるで狂人の集団ね」

劉表兵の突撃を見て、孫策が呟く。

「あれじゃ、どっちが獣だか分からないわね」

「どっちが、じゃなくて両方獣だぜ、嬢ちゃん」

すると後ろから兵の鼓舞を終えた劉表が言う。

「あまり私の後ろに立たないでくれる？間違っつて殺しちゃっわよ？」

冗談でなく、本氣の目をする孫策。

「カツカツカツ。それも上等じゃねえか。いつでもこの素っ首、はねても構わないぜ？」

それに劉表も鋭い目付きで答えた。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかしら？」

孫策は腰に差した長剣に手をかける。

それでも劉表は動じず、クツクツクツと喉を鳴らしている。

(気に入らないわね)

孫策は劉表の人を卑下した態度が鼻につくが、それよりもこの目の前の男は自分を見ていないと感じたのだ。

そして劉表は一度も自分の名を呼びはしなかった。いつも“嬢ちゃん”や“小娘”と呼ぶことも孫策の機嫌を害していた。

(それがどこまで続くか、試してあげるわ……………)

そして孫策は長剣を抜刀する。

勿論、寸止めするつもりであった。

だが、それは肉を裂いた。

ただそれは劉表のではなく、横から飛び出てきた乱入者のものだった。

「何ッ!？」

そして乱入者は斬られた右手を押さえつつも劉表と孫策の間に立ち塞がる。

「……………劉表の兵？」

そう。乱入者は顔を覆面で隠した劉表の兵であった。

劉表の兵が乱入したことに驚いた孫策であったが、しかし更なる

衝撃が孫策に走る。

バシントツ。

それは決して大きくはなく、乾いた音。

そして次に孫策が目にしたのは地に倒れる劉表の兵と馬鞭を振り抜く劉表の姿だった。

「……………あ、貴方、何してるのツ!?!?」

孫策が兵に手を貸そうとすると、兵が払いのけた。

そして兵は劉表に向き直り……………。

「勝手な真似をして申し訳ありません」

謝ったのだった。

それは異常な光景だった。

隊の隊長を守ったことを責められ、そして謝ったのだった。

「お前はここで何をしているんだ？」

劉表の声は凍えるほどに冷たかった。

先程までの飄々とした態度とはかなりの温度差だった。

「すみません。劉表様の危機が目についたもので……………」

「それは誰が命じたんだ？」

「いえ、それは……………」

バシッ。

馬鞭が兵の顔を打つ。

覆面が破れ、そこから血が出ていた。

「テメエらは俺の命令以外に動くんじゃないよ」

まるで虫を見るかのように兵を見下す劉表。

「チッ、興が冷めた。下がる、後は好きにしろ」

それだけ言うと劉表は陣から出ていく。

後に残ったのは孫策と兵だけだった。

「……………貴方、大丈夫？今、手当てを……………」

「お気にならずに……」

それを断り、兵は劉表と同じように陣から出ていくのだった。

3話 劉表という男

孫策には劉表と言う男が分からなくなっていた。

最初の印象は親の仇で、そして気に入らない男だった。

だが、彼を心配する臣の姿を見た。それこそ命を賭けてまで。

慕っている臣下がいる。孫策にはそれが理解しがたかった。

（なんであんな外道な男に……）

「れん、雪蓮！聞いているのか？」

物思いに更けていた孫策は周瑜が大声を出すまで気づかなかつた。

今、庭の開けたところで軍議の真つ最中であつた。

「全く。呆けていては困るのよ。これからもつと大変になるのだから……」

「もう分かつてるわよ」

「本当に分かつておるのかの？」

「なによ、祭まで」

「あははは〜」

黄蓋の言葉に孫策が不貞腐れると陸遜が笑つ。

とても和やかな空気であつた。

「カツカツカツ」

だが、それは不遜で不粋な笑い声にぶち壊しにされる。

「孫家の重臣たちが庭のど真ん中で何をしてるんだ？季節外れの冬籠もりの算段か？」

とそこに侍女らしき少女を連れた劉表が現れる。

「……何か用？私たちが忙しいんだけど」

劉表の顔を見るや、不機嫌な顔になる孫策。孫策まで露骨ではないが、他の将も嫌な顔をする。

「おうおう。威勢がいいな、嬢ちゃん。何か良いことでもあったのか？」

カツカツカツと笑う劉表。

その言葉に孫策が長剣に手をかけようとするのを周瑜が手で止める。

「それで劉表殿、私たちに用件でも？」

「おうよ。用件がなけりゃこんなところまで来ねえよ」

一々言動が孫策たちの琴線に触れるが、それを構わず劉表は続けた。

「袁術が呼んでるぜ。大方、また賊の討伐だろうよ」

「そうか。それは丁度良かった。私たちも袁術殿に用があったのだ」

「……………へえ。それは一体どんな用なんだろうな？」

「なんでそれをアンタみたいな奴に言わなきゃいけないのよ」

「雪蓮。……………用と言っても大したものじゃないよ。ただ、地方に散った兵を呼び戻したい、それだけだ」

「……………」

劉表の目が細くなる。鋭い目が更に鋭くなる。

「いつまでも劉表殿に頼ってはられないからな」

「……………ほお。そいつは助かるな」

勿論、それは方便であり、本来の目的は袁術から江東を取り戻すための戦力の増量である。

「俺はてつきり見晴らしもいいこの場所で離反の企てでもしてるのかと思っただぜ」

劉表もそれを分かっているがらあえて言っているのだ。

「我々は客将の身だからな、軍議に使える部屋は多くはないのだよ」

「そうなのか？俺はそう言うのしねえから分からなかった。また一つ賢くなったよ、礼を言っただぜ」

と心にもないことを言う劉表。

「そうだな、礼代わりにその件、俺が袁術に話つけてやろうか？」

ニヤリと笑う劉表。

「いや、それは遠慮しておくよ。このような細事に貴殿の手を煩わせるわけにはいくまいよ」

それをやんわりと断る周瑜。

流石は軍師。劉表の態度にも苛立ちを全く見せない。

「そうかい。なら伝えることは伝えたい、帰るか。……帰るぞ」

劉表はそう言うその後ろにいた侍女に一言かけて劉表はその場から離れる。

「ねえ、貴女……」

そして孫策は劉表の侍女のような少女に話しかける。

「……………なんですか」

少女は無表情で孫策に向く。

「それって……………なに？」

と孫策は少女の首もと……………首輪を指差す。

まるで犬に付けるかのようなその質素なそれだ。

「もしかして無理矢理付けられてるの？」

劉表の悪い噂を知る孫策は言う。

噂では劉表は奴隷商と繋がりと……………。

孫策もそれを思い出したのだろう。

「もし良かったら、私の下へ……………」

「何も知らない癖に」

「……え？」

孫策の言葉を遮るように少女言う。

「貴女たちは劉表様のことを何も知らない。あの方は本当は優しい方です」

「おい。なにしてんだ、行くぞ」

「……はい」

そして劉表の後を追う少女の右手と顔に傷があることに気づいた。

「……」

少女の言葉に声を失う孫策。

「……なによ。まるで私が悪者みたいじゃない」

そう呟き、孫策は二人の背中を見るのだった。

孫策たちの増援の願いはいとも容易く許可が出た。

そして孫家の旧家臣たちと合流して、賊の討伐に出向くこととなった。

そして、今は旧家臣たちとの合流場所から離れた寂れた町さびで休憩していた。

「おそらく明後日の昼頃には着くと思います」

陸遜が報告する。

「分かったわ。皆には今日は休むように伝えておいて」

「はい。了解です」

と陸遜が報告を終えて出ていこうとすると……。

「た、大変です！」

一人の兵が駆け込んできた。

「どうしたんですか？」

「今、斥候から連絡がありまして……」

必要はなかったが念を入れてと周瑜が放ったものだ。

「この村に向かう賊の一群を発見したと……」

「なんですって！？ 穩、今すぐ兵をまとめてちょうだい。それとそ

「この貴方は悪いけど冥琳にそれを伝えてちょうだい」

「はい」

「はっ」

と陸遜と兵が部屋を出ていく。

「こんな時に来るなんて……あ。アイツはどうするのかしら？」

と孫策は何故か付いてきたお邪魔虫（劉表）のことを思った。

そして、孫策たちが兵をまとめて村の外に出て応戦しようとする
と……。

「おう。随分と遅かったじゃねえか、嬢ちゃん」

既に劉表が門の前に覆面の兵たちを引き連れ、立っていた。

「それがどうしたのよ……」

不機嫌そうに孫策は言い放つ。

「アンタには関係ないでしょ」

「ああ。ないぜ。ないともよ、もうこれぼっちも、余すところなく、

つけ入る隙もなく関係ないな」

クククと喉を鳴らす劉表。

「……雪蓮」

孫策が無意識に腰の長剣に手を伸ばしたのを周瑜が止める。

「それで劉表殿、何故貴方はここに留まって居られるのですか？まさか賊がこちらに向かっているの知らないわけではないのでしょうか？」

「カツカツカツ。知ってるぜ」

とニヤリと笑う劉表。

「だからこうして、“迎え撃つ”準備をしてるんじゃないか」

「迎え撃つ？」

劉表は関でもないただの村で賊を受けようと言うのだ。

「何故、迎え撃たなければならないのよ！？そんなことをすれば……」

「民に被害がある、か？」

劉表の鋭い眼光が光る。

「それが何だって言うんだ？」

「貴方、なにを……」

「力なき民を俺たちが守っている。だが、民は俺たちに何をする？
税か？そいつは良いな。俺たちは命を懸けて、民は金か。カッカツ
カツ、こいつは傑作だと思わねえか、嬢ちゃん？」

「そんなの当たり前」

「当たり前？何故、そう言いきれぬ？人の命と金は等価だったのか？」

「それは……」

「カッカツカツ。無駄だぜ、嬢ちゃん。こいつは水掛け論だ。答え
はないよ。それよりも時間が惜しいぜ？」

と劉表は門の向こうを、もう直ぐ来るであろう賊を見る。

「雪蓮、今は周りの住民の避難が先だ」

「……分かってるわよ。劉表……」

「ん？」

「私はアンタのやり方を認めないわよ」

「カッカツカツ。アンタはそれでいいよ、嬢ちゃん」

「…………劉表様」

「なんだ、準備はできたのか？」

後ろに現れた覆面の兵に言う。

「はい。ですが、あの……………」

「なんだ？」

「いえ……………」

「ならさつさと配置に付け、愚図が」

「はい」

「全く……………分かってんだよ、それぐらいよお」

と誰になく呟く劉表であった。

4話 外道の烙印

賊が村の目前まで迫る。

だが、門は閉まっているが、それを警備する兵の姿はなかった。

賊も楽な仕事だと思っていた。

門の前に着くまでは……………。

「やれやれ、全く遅いな。待ちくたびれちまったぜ」

門の上に現れた劉表が言った。

「何者だ、テメエは!？」

賊の一人が劉表に向かって叫ぶ。

それを笑みを浮かべたまま受け止める劉表。

「何者だと言われりや、劉表だ、と答えるしか他はねえな」

ニヤリと笑う劉表。

「まあ別にオメエらが気にすることはねえよ。門を破りたきゃ勝手にやればいい」

「なんだ？……まあ、いい。オメエらやっちまえ！」

と賊たちが門を壊そうと取り付いた時、劉表の笑みは益々深まる。

「まあ、俺も勝手にオメエらを駆除するだけだからな……」

劉表が手をかざすと両脇から水瓶を持った兵が現れたそれを門下の兵に落とした。

「なッ！？オメエ、邪魔しねえんじゃなかったのかよ！」

「俺はそんなこと言ってねえよ。俺は門を破る行為を許可したんじゃないよ。否定しなかったただけだ。それより逃げなくていいのか？」

「なに言ってやがる、水瓶くらいで………なんだこの臭いは？」

「まあ水瓶くらいでどうにかなるなんて考えちゃいねえよ」

口の端を上げたまま劉表は言う。

そして、次に松明を持った兵が現れたのを見て賊の顔色が変わる。

「ま、まさか……………」

そう。水瓶の中は水でなく油。

「て、テメエ、それでも人間か!？」

「生憎、人間だぜ。ただ、外道に堕ちた人間だがな」

と劉表の合図で松明は下に投げられ、下は正に阿鼻叫喚、地獄絵図と化した。

「アイツら、火を使うなんて……………」

それを門から離れた所で見ていた孫策。

「確かに賊は退けられるけど、門が……………」

正規の関でなく、ただの村の門だ。石造りでもなければ、まして鉄でもない。木で造られた門だ。火を使えばどうなるか、誰でも分かることだ。

案の定、賊は退いたが、門は半壊した。

「ホントにあいつは何を考えてるのよ！」

孫策は一人愚痴りながら夜の町を歩いていた。

そして半壊した門の前で一人佇む劉表を見つけた。

「何をしているの……………」

孫策が劉表に近づこうとした時。

「近づいてはいけません」

と後ろから声をかけられた。

そこには覆面の兵がいた。

「劉表様は今、誰にもお会いになられたくありません」

と覆面の兵は自分の覆面を取る。

「え？あなたは……………」

そこには顔に傷のある少女がいた。

「貴女、劉表の侍女じゃなかったの？」

「いえ。私は劉表様の身の回りの世話をさせていただいてるだけです」

「じゃあ、その首輪は？」

孫策は今も付けている首輪を指して言う。

「これは劉表様からの頂き物ですが、無理矢理付けさせられてるわけではありません」

「……………」

疑いの目を向ける孫策。

劉表が少女にそう言わせている可能性は捨てきれないのだ。

「別に信じていただかなくても結構です」

少女もそれを理解して、そう言った。

「あの方は様々な誤解を受けやすいのです。そしてそれを解こうともしない。いえ、意図的にさえしているような言動もあります」

少女は孫策を通り越し、一人佇む劉表を見つめる。

「何故、劉表様が火をお使いになったか分かりますか？」

と孫策の目を見て話す。勝ち気につり上がった目が印象的な少女だった。

「そんなの……………劉表の趣味じゃないの？」

劉表の性格からしてそんなもんだと思っている孫策。

「いいえ、違います。貴女にはこの村がどう見えましたか？」

「ちよつと、答えを教えなさいよ」

「この質問に答えたらお答えしますよ」

「……………普通よ」

「そうですね。普通に“貧しい”村です。今、袁術の治める土地でこれより質のいい村は袁術のお膝元ぐらいでしょう」

袁術の悪政によりほとんどの村は貧しかった。

「それで最初の答えは何なのよ」

「門が壊れたら直さなくてはいけません」

「当たり前じゃない。あれじゃ、賊がまた来たら直ぐに入られちゃうわよ」

「では、もし我々の過失で門が壊れたらどうすればいいと思います

か？」

「そんなの謝罪して、建て直してあげなくちゃ」

「はい。その通りです」

分かりますか？と言う顔をする少女。

「我々の過失で壊れた門は我々が直す。無論、城にいるお抱えの大工たちを呼ぶわけではなく、この村にいる大工たちに頼むわけですけど……………」

「そのくらいは分かるわよ」

「大工たちには城から給金が支払われます。そして給金に入った大工たちはお金をこの村で使い、そして他の商家たちも儲かる。こうして城からのお金は村全体に行き渡るんです」

「……………」

言葉の出ない孫策。

「まさか、アイツがそこまで考えて……………」

「私も劉表様自身から聞いたわけではありません。でも……………」
と覆面を見る少女。

「この覆面は私たちの為のものなのですよ」

「……覆面が？」

「これは劉表様が私たちに付けるように言われたものです。それは他者との区別がつかないようにするためです」

「それがなんだって言うの？」

「そして私たちに人を殺す不安を軽減させるものです。我々の部隊は誰もがこの覆面を被り、身元が割れないようになってます。ただ、劉表様を除いては……。劉表様は私たちが殺した罪を、恨みを全てその一身に受け止めるために我々には覆面を付けさせ、自身の顔だけを晒しているのです」

いくら敵だったからと、賊だからと言え、彼らにも彼らの人生がある。

それを知ってしまったって人は人を殺す覚悟が鈍る。だからこそ劉表は兵に覆面を被せ、不特定であることの心理的優位を作り出すこと、そして自分だけが顔を晒すことで兵たちの不安を取り除いた。

「そしてあの方はいつも戦いの後はああして戦場をただ見つめられています。そこであの方が何を思っておられるのか、私には分かりませんが、それでもあの方のことを信じていますから……」

「……ふうん」

と孫策は少女と同じように劉表を見つめる。

「分かったわ。邪魔しないわよ。それで貴女、名は？」

「私のですか？」

「そうよ。アイツはあまり好きになれないけど、貴女はなんだか気が合いそうな気がするのよね」

「それは……………気のせいですよ」

「そうかしら。私の勘はスゴいのよ？」

「それなら勘違いです。……………はあ」

諦める気が更々ない孫策にため息を吐く少女。

「私の名は 「じゅんせき」 黄射」

「ッ!？」

「あなた方の母親、孫堅を殺し、あなた方に殺された黄祖の娘です」

「まさか、貴女が……………」

「別に復讐とか恨んだりとかは考えてませんよ？父とは疎遠でしたから、別に構いませんから。それに……………」

と少女 黄射は再び劉表を見る。

「私は劉表様の剣です。劉表様の命以外でこの武を振るうことはありません」

「アイツのどこにそんな魅力があるのかしらね？」

この少女がそこまで心酔させている劉表。

孫策にはそれが理解できなかった。

「私はずっと見てましたから、劉表様を」

「黄射……………」

少女のそれはまるで恋するように、羨望の眼差しのように……………。

「……… ったくよお。後ろでごちゃごちゃうるせえよ、このド阿呆が」

とそこで二人の間についての間にか劉表がいた。

「すみません、劉表様。お邪魔してしまいましたか？」

「……………別に構わん、もう済んだことだ。それよりさっさと戻れよ」

そして劉表は二人の間をすり抜け、どこかへ行ってしまふ。

4話 外道の烙印（後書き）

とりあえずここまでです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

5話 徹して悪を為す

村を出て、孫策たちは旧家臣たち、孫権たちと合流した。

だが、賊が根城にしていた砦が厄介であった。

絶壁に添うように建てられた砦は、前から攻めるしかない。

「全く、賊の癖にこんなところに籠るなんて生意気ね」

孫策がそう呟く。

「もう私が出て、すぱーっと終わらせましょうよ」

「姉様！？貴女は孫家の家長なのですよ！？それが前線に出るなど

……………」

孫策に異議を申し立てたのが妹の孫権だった。

「でもねえ、蓮華。このまま膠着してても進まないのよ?」

「それでも姉様が前線に出るのは……………。これでは母様の……………」

「蓮華様は文台様が城攻めの時に命を落とされたことが気になるのですか?」

周瑜が孫権の意図を汲む。

「私がここで命を落とすって?ないない、そんなのないわよ」

「それでも私は……………」

心配そうに孫策を見る孫権。

「……………。あまちゃんな寸劇はいいからよお。方針は決まったのかよ?」

そんな間に劉表の声が聞こえた。

「アンタねえ、少しは空気を読みなさいよ」

「カッカッカッ。それで得するならやってやるよ」

「貴様、何者だ!?!」

突然の乱入してきた劉表に孫権の護衛の甘寧が構える。

「ちょっと、アンタは外で待機って言ったでしょ。なんでここに居るのよ」

「あまりにも長えんだよ。さっさと終わらせちまえばいいじゃねえかよ」

「姉様、この者は誰なのですか？」

「ああん？俺か？俺は　　劉表だ」

軍議は孫策たちで行う。それには劉表自身も納得したことだ。

それに劉表を孫権たちが知れば……………。

チリン。

甘寧の得物が抜かれる音がした。

こうなるのが目に見えていた。だから孫策は劉表を外で待たせていたのだ。

「思春、止めな　　」

ヒュン。

孫策が甘寧を止めようとした時、風を切る音が聞こえた。

「　　誰に手を上げたか分かってんのかあ、餓鬼？」

『 ツ！？』

そしてそこには甘寧が得物を構えるより早く、馬鞭を甘寧の首に当てた劉表がいた。

「ったくよ。血気盛んは呉の特徴か？」

劉表は馬鞭を戻しながら呟く。

そう毒づく劉表はドカツと空いていた椅子に座る。

「で。方針はまだ決まんねえのか？」

「煩いわね。今、決まるところだったのよ」

「だから、姉様が前線に出るのは反対だと申し上げてるじゃありませんか！」

「じゃあ、他に案があるの、蓮華？安全な戦なんて無いのよ？」

「それでも……………そのような危険な行為を許すわけには……………」

そして話は戻るわけだが、一つ違うのは劉表が居たことだろうか。

バシン。

劉表が机を馬鞭で叩いたのだ。皆の注目が劉表に集まる。

「……………ああ。虫がいた」

それだけ言う劉表。

「後、かつたるいから俺が攻め落として構わねえか？」

「なにを言ってるのよ、アンタは!？」

劉表の言葉に孫策が喰ってかかる。

「まあ、そう意気がんなよ、嬢ちゃん。第一、攻め落とすと言っても言葉の綾だ。陽動つてやつだ。俺が正面で騒いでるから、後はそつちで勝手に上手くやれや」

それだけ言うと劉表は席を立ち、その場を後にする。

「あ、そうだ。一つだけ、言っとくぞ。派手に決めんなら火だろうよ、やつぱ」

そして今度こそ、出ていく劉表。

「何なのよ、最後のは……………」

「……………火か……………派手に……………ッ!? 穩、ここの食糧庫はどこだ？」

「はいはい。確かこの砦の地図だと……………ここですね」

と紙の地図を指で示す陸遜。

「……………やはりか。思春、明命。劉表の隊の動きに合わせて、この食糧庫に火を放ちなさい」

『はっ』

「なによ、冥琳。アイツと共戦するっての？」

「違うわよ。劉表も言っていただろ？勝手に上手くやれ、とな。だから私たちは勝手に火を放ち、それが上手く噛み合った。ただそれだけだ」

「ぶう」

「不貞腐れてないでよね。今はどんなものを利用して名を上げなくいけないのよ。それこそ、親の仇でもね」

「分かってるよ、それくらい」

そう言って孫策は劉表の出た方を見る。

(でもやっぱり気に入らないのよね……)

「……………カッカッカッ。どうやら、気づいたみたいだな」

劉表は自分たちの影で動く孫策たちを見て、笑う。

「劉表様」

「あぁん？どうかしたか、黄射？」

覆面を被っているにも関わらず、劉表は己の隊の人間の名を当てられた。

「準備が出来ました。劉表隊、いつでも逝けます」

「ふん。じゃあ、かつたるいに行くか……」

そして劉表は自分の隊を率いて、賊の根城の砦の前に立つ。

「なんだ？誰か出てきたぞ………つてあれは！？」

見張りをしていた兵が単騎で出てきた劉表を見つけて、首を傾げながら、劉表の顔が段々と認識できる距離までくると顔が青ざめていった。

「カッカッカッ。どうやら、俺の顔に見覚えのあるやつがいるみたいだな？やっぱりここの賊だったか……」

そうこの間、劉表に撃退された賊はここから来た者たちだったのだ。

「なあ、誰も逃がすなんて言っただけでねえよなあ？さあ、始めようか、一方的な蹂躪だぜ。今度は逃げてもいいぜ？ただし俺の前を通るってんならもれなく殺戮だな」

ここで自然の要塞が仇となる。

守りやすいが、逃げ道が正面しかない。

もしかすれば抜け道があるかもしれないが、賊がそこまで砦の内情に精通しているとは思えない。

だからこそ劉表の言葉は死刑宣告だった。

「カツカツカツ。さあ、我が獣共。殺戮の時間だ。存分に喰い散らかしてこい」

『ウオオオオオオオ』

兵たち　　獣たちの咆哮が空気を揺るがした。

「囧………なのかしら、あれは？」

普通なら門前にて引き付けるだけでいいのだが、劉表隊はまさに砦を攻め落とさんばかりであった。

「別にいいのではないか？我が兵が傷つくわけでもないのだから」
孫策の言葉に周瑜が返す。

「……冥琳も意外と悪よね」

「いやいや、劉表あわれほどじゃないよ」

と周瑜は今も戦い続けている劉表隊を見る。

そこには死んだ仲間や敵を盾として、城壁からの矢を防ぎ、門に取りついていた。

そして甘寧、周泰による火計が成功し、敵が浮き足だったのを見て、孫策たちも砦を攻めた。

そしてほどなくして砦は落ちた。

そして、“孫策軍”に一切の被害なく賊を討ち取ったことにより、一層に孫策たちの名が知れ渡った。

5話 徹して悪を為す(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

6話 諸侯集いし時（前書き）

反董卓連合編です。

本来、黄巾討伐なのですが、そしてそこで蓮華たちとの合流。

作者、すっかり忘れてまして……ははは。

プレイし直したら、気づきました。

まあ、所詮は外史の外史。心広い読者であることを祈る作者です。

6話 諸侯集いし時

黄巾党は曹操が首魁、張角を討ち取ったという報により、収まりをみた。

だが、戦乱はまだ始まってもいなかった。

その始まりの鐘となる報が孫策たちに舞い込むこととなる。

それは袁紹の発した逆賊董卓討伐の檄文だった。

そして、それを袁術へ見せ、反董卓連合への参加を煽る。

しかしそれは孫策たちの罭。孫呉独立への布石。

「……………それで、反董卓連合に参加するってんだな？」

袁術に呼ばれ、劉表が謁見の間に来ると袁術の他、張勳と孫策がいた。

「そうじゃ。なのでお主も準備をするのじゃ」

「はあ？俺も行くのかよ？」

「当たり前じゃ、妾も行くのじゃ。部下であるお主らが行かんとどつするのじゃ」

「ふうん……………」

とチラリと孫策を見る劉表。

「カツ。了解したぜ」

そしてニヤリと笑みを浮かべた劉表はそれだけ言って部屋から退室する。

「……………じゃあ、袁術ちゃん。私も準備に行くわね」

「うむ。善きにはからえ」

続いて孫策も退室していった。

「それで何を考えてるんだ、嬢ちゃん？」

孫策が部屋を出ると壁にもたれた姿勢の劉表がそこにいた。

「……なんのことよ」

「カツ。惚けるってのか？まあ、それも良しだがな」

それだけ言うと劉表は壁から背を離し、歩いていく。

「……ふん。見てなさい。袁術だけじゃなくアンタも、ね」

こうして江東の麒麟児の雌伏の時は終わろうとしていた。

そして反董卓連合に集まった諸侯たちの集合場所にてこれで何回目

となる軍議が開かれていた。

袁紹の檄文に集まったのは袁術、その客将孫策、曹操、公孫瓚、涼州連合に劉備だった。

もちろん、劉表もその列にいた。

そしてその代表たちが集まる軍議が何度も行われていた。

しかしそれはどのように目の前の難攻不落の関を落とすかを話し合われているわけではなく、そのもつと前の状態で止まっていた。

簡単に言ってしまうえば総大将が決まらないのだ。

いや、やろうと思えばすぐに決まる。なのだが……………。

「では皆さんに聞きますが、この兵も質も兼ね備えた連合に足りないものがありますわ」

連合の発起人である袁紹が、これまた何度目かになる言葉を口にす
る。

「……………はあ。で、それは何かしら？」

曹操がそれのために息を吐きながら返す。

返さなくては同じことを繰り返すものだから厄介なものだ。

「あら、華琳さん、分からないのです？仕方ありませんわね、それでは名門袁家たるこの私、袁本初がお教え差し上げますわ。それはこの連合の象徴たる総大将ですわ。ですが、困りましたわね。この壮大な連合を束ねるに相応しい、富と名声、そして地位も兼ね備えたそんな方が居られるのかしらね。そう例えば三公を輩出した袁家のわ！た！く！し！のような方がね」

要はこの袁紹は総大将がやりたい、だが自分からは名乗りあげない。正に厄介なものだ。

そしてその膠着状態に痺れを切らしたのは……………。

「あ、あの！」

と一番末席に居た劉備が声を上げた。

そして被害を被ることも省みず、袁紹を総大将に推そうとする。

だが。

「なら、袁術でいいじゃねえか」

劉備の言葉は劉表の横やりで遮られた。

「金は腐るほどあるしよ。名声だってよ、一応江東を実質支配下だ、文句はねえよな。後は地位だったか？それもアンタと同じ袁家だ。まさか異存はねえよな」

と袁紹を見る劉表。

「え？み、美羽さんですか？」

「そうだけ。我が主、袁公路サマを俺は推すが、他にいないのならば、決まりでいいよな？」

と劉表はニヤリと笑う。

もうこの場は劉表の独壇場と化していく。

「ちょ、ちょっと待ちなさい、ですわ。み、美羽さんにはまだ早すぎますわ」

慌てたように袁紹が言う。

「ほう。ならば他に誰かいいやつに心当たりがあるのか？なに、別になくても構わねえよ。どうせ、形だけの総大将だからな。誰だろ」と変わらねえよ」

そんなものは誰もが分かっている。

ただ見栄っ張りな袁紹を除けば、誰もそんなものをやりたくはなかった。

「な、なら私がやりますわ」

『ッ！？』

そして袁紹のその言葉に軍議に出ていた諸侯が驚く。

だが更に驚くべきことは……………。

「じゃあ、決まりだな」

と笑みを浮かべた劉表の存在であった。

「他は異論はねえよな？」

と辺りを確認するが皆呆然としているため、返事もできなかった。

「それじゃあ、反対皆無で、袁紹自身の“自推”で袁紹が総大将なそれじゃ、方針の方よろしく頼むぜ」

と劉表は深々と椅子に座り、目を瞑る。そしていびきをかき寝始めたのだった。

6話 諸侯集いし時（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

7話 霸王との邂逅

劉表の機転により総大将も決まり、トントン拍子にことは進んだ。

とはいえ、袁紹だ。ろくな作戦もなく、ただ『雄々しく、華麗に、前進』の一言だった。

まあ、それでも個々の能力が高いため、各々の裁量で乗りきれぬのだ。

そして軍議とは名ばかりの腹の探り合いを終えて各陣営に戻る中、劉表を止める者がいた。

「そこの貴方、ちょっと待ちなさい」

「ああん？なんか用か、小娘」

そこには側近二人を携えた少女がいた。

「貴様、華琳様になんて口の聞き方をするのだ！？」

側近の一人が劉表に喰ってかかる。

「春蘭、止めなさい。貴方、確か劉表だったわよね」

「そういうアンタは誰だ？」

「軍議の場には居ただけだけど覚えてないかしら？」

「悪いな。俺は他人に興味ねえんだ」

「ふっ、そう。なら改めて名乗らせてもらおうわ」

劉表の人をおちよくった口調も受け流し、少女は凜と立つ。

それは正に王の風格だった。

「我が名は曹孟徳。霸道を歩む者よ」

「ほう……」

それを聞き、劉表の目がつり上がる。

「曹嵩の娘か……」

「母様を知っているのね」

「カツ。俺はお前たちより前の人間だぜ？知ってて当然だろがよお」

「それもそうね。……………江東に眠る獣は未だ健在のようね」

「江東に眠る獣？なんだ、その餓鬼が好きそうな名はよお？」

「貴方の呼び名よ。江東の虎、孫堅。その娘、江東の麒麟児、孫策。それらと対を為す存在、それが貴方よ。まさか袁術が獣を二匹も飼っているなんて思いもしなかったわ」

「カツ。買い被り過ぎたな、小娘」

「そうかしらね。袁紹を丸め込めたあの話術は中々のものだったわよ」

「それこそ買い被りだな。あんなもんが話術ってんなら言葉を覚え
た餓鬼は詐欺師に成れらあ」

劉表はそう言った。

「……………で。本題はなんだ、小娘？ただの世間話をしに来たんじゃねえよな？」

「そうね。単刀直入に言うわ。貴方、ウチに来ない？」

『華琳様ツ！？』

「……………はあ？」

側近の二人と劉表がそれに驚く。

「貴方の部隊の噂は知ってるわよ」

時として噂は尾ひれが付くが、それとは逆に劣化して伝わることもある。

そして劉表の噂は江東なら未だしも、江東から離れた曹操の治める地には生憎劉表の狂気は伝わってはいなかった。

だが、民にとっては劉表の狂気はよく見えることがあるのも確かであった。

自分たちを苦しめた賊を残忍な殺し方をするのを見て正直スカツとするのだ。

それで劉表の噂が薄まるのも否めない。

「カツ。それならテメエで手に入れやがれ」

そして劉表は懐から髑髏の煙管を出し、吹かせる。

「俺はあの地を出る気はねえよ。もし俺を手に入れたきや。江東を手に入れて強制的に配下にしろ。手え抜いてんじゃねえぞ、小娘」

「もう我慢ならん！貴様、そこに直れ！この夏侯元讓が叩き斬ってくれわ！」

「春蘭！」

「華琳様、すみません。私もそろそろ限界なのですが……………」

「秋蘭、貴女まで…………。はあ…………。劉表、彼女らももうそろそろ限界らしいわよ？いつまでも“わざとらしい”口調は止めなさい」

『…………は？』

「カツカツカツ。分かるもんか、これ？」

劉表は煙管の灰を捨てて、懐へ仕舞う。

「まあ、よしだな。だが、さっき言ったのは本音だ。俺は江東からは出ねえよ」

「そう。なら、江東ごと貴方を手に入れることにするわ。帰るわよ、春蘭、秋蘭」

「え、あ、あの。華琳様？」

そう言うと曹操は踵を返し、自分の陣へと歩いていってしまふ。

「劉表、今日は華琳様に免じて許してやるが、次は無いと思え！」

夏侯惇はそう言うと曹操の後を追う。夏侯淵は無言ではあったが劉表を睨み付け、追っついていった。

「カツ。霸王ねえ……………」

そして劉表は曹操たちを見て、笑う。

それは歡喜による笑みか、それとも偽装によるポーカーフェイスか。

7話 霸王との邂逅（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

8話 悪の信念

洛陽への道中、難関となりえるのが、シ水関、虎牢関の二つだ。関だけでも厄介だと言つのにそこには華雄、張遼、呂布といった猛将が詰めている。一筋縄ではいかないだろう。

そして、悲劇にもその初めの難関シ水関で先鋒を勤め“させられた”のが劉備軍だった。

この連合の中でも弱小の劉備軍を体のいい生け贄に袁紹がしたのだった。

いや、他に命令を聞いてくれる諸侯がいなかったのか……………。

「……………ほう。嬢ちゃんは劉備と手を組むつもりか……………」

袁術の陣営から少し離れた位置に陣を展開していた劉表が孫策たちの動きを見て、呟く。

「ふん。今後のために外の味方を作る、か……………。それに……………嬢ちゃんの妹とあの宿将がいねえな。カツ、もう既に次の手が打たれてるって訳か……………」

カッカカッと劉表は膝を叩いて笑う。

「……………祭壇」

「はっ、お側に」

劉表が呟くと、シュタツと後ろに覆面の兵が現れる。

バシッ。

すると劉表は現れた覆面の兵の頭を馬鞭で叩く。

「テメエは呼んでねえよ、張允」

「な、何故、分かれるのですか、劉表様？」

頭を押さえながらも覆面の兵

張允が劉表に聞く。

「はあ？そんなもんはテメエと祭瑠が別の人間だからに決まってんだよ。下らねえことやってるど犯すぞ、この女がッ」

「……申し訳ありませんでした」

おかしなことに劉表が区別をつけさせないために被らしているはずの覆面を着けているにも関わらず、劉表には見分けられた。

もしかしたら劉表だけが分かる目印でもあるのかと、試しに祭瑠と張允が覆面や衣服を交換してこうして現れたのだが……。

結果は見ての通りだった。

「カツ。まあいい。張允、祭瑠に伝える。テメエは一旦、江東に帰って兵の準備をしとけつてな」

「……はっ」

とまたシュタツと消える張允。

「……さて。どうするか見物だぜ、嬢ちゃんよお」

今、正に劉備軍がシ水関へ進軍していく時であった。

劉備軍の策はこうだった。

砦に籠る華雄を罵り、砦から引き摺り出すのだ。

いくら堅牢たるシ水関だが、それから出してしまえば、数で勝る連合に勝機があるのだ。

しかし、意外にも華雄が挑発に乗らないのだ。おそらく一緒に詰めている張遼が止めているのだろう。

そこで孫策が劉備軍を手助けするために袁術の許可を得て、軍を進めた。

「……………」

その様子を鋭い目で射抜く劉表。

手に持つ煙管を一度吹かせると、カンツと灰を捨てる。

「そろそろ行つとくか……………」

そして有象無象がこつた返す連合内においても異質にして異色。劉表軍が動き始めた。

「中々出てこないわね、華雄のやつ」

一度負けている孫策の母、孫堅をエサにしたのだが、中々出てこない。

(でも、もうそろそろかしらね……)

後は軍を不用意に近づければ、華雄の堪忍袋の緒も切れるだろう、と孫策は思っていた。

いや、実際にそうだったのだろうか。

だが、“事実”は違った。

孫策たちが軍を進めようとした時、赤水関の両脇から牙門旗が上がる。

黒字に朱で書かれたその文字は……。

『悪』

「カッカカッカ。華雄、相も変わらず猪だな」

そして、このような禍々しい牙門旗を掲げるのは劉表ただ一人だ。

「目の前にしか集中できない。いや、集中したらそれ以外が見えなくなるが正しいか」

そして劉表が両脇の崖の上から華雄に話しかける。

「カツカツカツ。だから脇がから空きだぜ？」

「ちょ、ちょい待ちや！アンタ、どこから登ったんや！？」

劉表の登場に張遼が言う。

シ水関の両サイドは関と同じくらいかそれ以上の高さがあり、そして正に絶壁であった。

それを登るなど考えられなかった。

「ああん？気づいてなかったのか？この両脇の崖はある一部を彫り抜いてあつて登れるんだよ」

それはさながらロッククライミングのように……。

「それに俺も上から紐を垂らしておいたからな……」

「なツ！？そんなことをいつの間にしたんや！？」

「はあ？そんなもん　昔だよ。俺がまだ都仕えしてた時だな。まさか今もこんなもんが残ってるとは思ってもいなかったがな」

カッカッカッと笑う。

「さて。無駄話もこれくらいだぜ。ここからは……………」

悪鬼羅刹、魑魅魍魎の跳梁跋扈する地獄絵図の始まりだ。

劉表の合図で両脇の崖に控えた劉表兵が取り出したのは……………。

「あれは！？全員、後退しなさい！」

孫策がそれを見て、全軍を後退させる。

「劉備、貴女も下がりなさい。ここに入れば巻き沿いを喰らうわよ」

「え？孫策さん、どうしたんですか？」

ガシャン。

水瓶が割れる音がシ水関に響く。

それは油の入った水瓶だった。

そして火を放った。

シ水関は火に包まれた。

だが、それだけには終わらなかった。

「さあ、まだまだだぜ？もっともっとだ」

水瓶だけでなく、小瓶に入った油も投げ放ち、さらに火は増す。

董卓軍は浮き足立つ。

しかし、驚くべきことはそれだけではなかった。

劉表兵がその火の中を進んでいったのだ。

まるで死ぬことが前提であるかのような戦い方だった。

劉表の奇策、いや忌策によりシ水関は落ちたのだった。

そして焼け残ったシ水関には『悪』の牙門旗が靡いていた。

しかし、劉表の連合での印象はこれで確定した。

非道で残忍、人の命を命とも思わない作戦。

正に悪鬼羅刹の如き男。

「ああん、なんだって？もう一度言ってみろ、小娘」

「だから、あんな戦い方は止めてあげて下さい！兵士さんたちが可愛そうです！」

劉表と対峙するのは劉備。横には関羽と張飛が控えていた。

「カツ。だから、何だって言うんだ？」

真っ直ぐに純粹な目を劉表に向ける劉備だが、その視線はまるで柳に風、暖簾に腕押しだった。

「俺の部隊をどう扱おうが、俺の勝手だろうがよ」

「そ、それはそうですけど……………」

劉備が劉表に押し負けそうになると……………。

「だが、まるで兵の命を軽んじるかのような策には賛同できかねます」

関羽が助け船を出す。

「それにあのような残酷なやり口は……………」

「残酷？ああ、火計のことか？火計なんて誰でも使うだろが」

「だが生きている人間に直接使うなど……………」

奇襲や相手を動揺させる場合に多く使われる火計だが、劉表のそれは明らかに人を殺すことを目的としているかのような節があった。

「だから、なんだというのだ？」

「なにい！？」

「俺は効率よく殺せる方法で殺るだけだ。それだけだぜ」

「効率だと…………。ふざけるなッ！戦いとはそのようなものではない！お互いの武のぶつけ合う、真剣勝負だ！そのようなことは相手への侮辱に他ならない！」

劉表の言葉に関羽が激昂する。

「知るかよ。それはテメエの考えだろうが。他者にそれを押し付けんじゃねえよ。俺には俺の考えで動いてんだ」

「考え、だと…………？」

「一殺千生。一人殺して後の千人を救う。その為ならば誰であろう」

と、何を使おうと殺す。例え敵でも味方でも、だ」

「な、なんだ、それは……」

「理解してくれなくても構わねえよ。ただ覚えておけ。所詮、戦うやつは屑だ。それが悪人だろうと善人だろうとな。俺はそいつらを全てを喰らい尽くしてやるよ。テメエらもな。もしそれが嫌なら俺を喰い殺してみろよ」

カツカツカツと笑いその場を立ち去る劉表。

「くっ。なんとという奴だ、劉表。あれで荊州を統べていたというのか……」

「愛紗ちゃん。私は劉表さんの言葉少し分かる気がするよ」

「桃香様!?!」

「うっん、別に劉表さんが正しいって言うんじゃないよ。でもね、劉表さんの言う千生の中には民の人のことが入ってるんだと思うんだ。口は悪いけど、多分性格はそんな悪い人じゃないと思うよ」

「桃香様がそう言うのでしたら……」

劉備の言葉に關羽の怒りは収まりつつあった。

「愛紗、お姉ちゃん。話は終わったのだ？それなら鈴々お腹空いちやったのだ。早く戻ろうよ」

「はあ、鈴々、お前というやつは……」

「あはは。じゃあ戻ろうか、愛紗ちゃん、鈴々ちゃん」

「はい」

「応、なのだ」

と張飛の言葉で先程の研ぎ澄んだ空気は吹き飛ぶ。

(劉表さん、か。なんだろう、どこか悲しげに見えたんだけどな…)

8話 悪の信念（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

9話 劉表と孫策（前書き）

劉表さんが戦います。

戦闘描写？いいえ、ケファイアです。

9話 劉表と孫策

シ水関を抜けた連合に次に待っているのは虎牢関。

そして虎牢関に詰めるは天下の飛將軍、呂奉先。

難易度はシ水関の比ではなかった。

そしてそんな虎牢関に対して総大将、袁紹が下した策は……………。

「虎牢関には劉表さんに行ってもらいますわ」

だった。おそらくはシ水関での手柄が妬ましく、嫌がらせに近いものだ。

というか、嫌がらせだった。

そしてそんな袁紹に対して劉表は……。

「断る」

拒否した。いや、暗に拒否したわけではない、仮にも連合の総大将に向かつて軍議の場で堂々と拒否した。

「な、なんですって！？貴方、連合の総大将である私の命が聞けないと言うんですの!？」

「ああ、聞けないね。俺の飼い主は袁術だからな。袁術を通して命令しな、小娘」

「きいー！誰が小娘ですって、誰が!」

これは暗に不可能と言っているのだ。

従妹である袁術にプライドの高い袁紹がそう出来ないのを見越して、劉表は言っているのである。

「だけど、貴方。総大将であるこの私に齒向かったらどうなるか分かってますの？反董卓が反劉表となるやもしれませんわよ？」

袁紹は最後の手段に打ってでる。……………が。

「それがどうした？」

「……………へ？」

劉表の言葉に袁紹が間抜けな声を出す。

「カツカツカツ。それはそれで良しだな。なんなら今直ぐにでも始めるか？」

「あ、貴方、正気ですの！？こんな大軍に勝てると……………」

「思っちゃいねえよ。まあ、それでも……………テメエの首くらいは討ち取って死んでやるよ」

と劉表は口の端を上げ、笑う。

「ヒイツ！？」

「カツカツカツ」

袁紹がズザッと後退るのを見て、笑う劉表。

「それぐらいにしとけよ、劉表も本初も。本初も無謀な策じゃなくてまともなのを考えような」

とそこで仲裁に公孫贄が入り、話は終わる。

「それで本当にどうするんだ、本初？虎牢関にはあの呂布が詰めるそうじゃないか。それに敗走した張遼も合流したって聞いたし、一筋縄ではいかないと思うぞ」

「そんなもの伯珪さんに言われなくても分かってますわ」

こうして波乱はあったが、軍議は進んでいった。

そして虎牢関には袁紹、曹操が当たり、補佐として袁術、劉備、公孫贄が配置され、孫策、劉表は後曲にて待機となった。

どうやら曹操は張遼を捕縛するつもりらしい。

呂布は袁紹に押し付け、全軍で張遼に当たっていた。

一方、押し付けられた袁紹は数の暴力によりなんとか押し留まっている状態だった。

だが、それも時間の問題か……。

「……………ほう。あの小娘が動くか」

すると劉備軍が袁紹軍を助けるように動くのを見て劉表が呟く。

「何か策でもあるのか？……………まあ、俺には関係ないな」

そしてニヤリと笑う。

「……………随分と遅かったじゃねえか。待ちわびてたぜ、嬢ちゃん」
と振り返ると孫策がそこに居た。

「その人を見透かしたような口調が気に入らないのよ」

怒気を抑えようとせず、孫策は獰猛な目で劉表を睨む。

「カツカツカツ。テメエに気に入られようとは思わねえよ」

それをまるで風の如く受け流す劉表。

「それにしても、いいのか？孫呉の王が一人でこんなところまで来てよお」

「ふん。私が一人でここまで来れる程度なら問題ないわよ」

「カツカツカツ。ウチの警備はザル、か……」

劉表は煙管を懐から出し、吹かせる。

「それで何か用か？」

「ええ」

と孫策は腰に差した長剣を抜き、剣先を劉表へ向け……。

「劉表。私と勝負しなさい」

そう宣言した。

「ッ!? …………… ほう。血は濃く受け継がれてるってわけか」

劉表は一瞬だけ驚くが、それは刹那のこと。すぐにいつもの悪どい笑みが浮かぶ。

「いいだろう。その勝負受けてやるっ」

と劉表は座っていた椅子から立ち上がる。

「劉表様！なりません！」

そこに覆面の兵が一人劉表に駆け寄る。

「劉表様、何故貴方がそのようなことをなさらなければならないのですか!？」

「黄射か……。ただの暇潰しだ、邪魔をするなよ？」

覆面の兵　　黄射を一瞥し、そう言い放つ劉表。

そして孫策の前に立ち、煙管を構える。

「そんなもので私とやろうっていの？」

「カツカツカツ。テメエ相手ならこれで十分だ」

「なめる……なッ!!」

孫策は下からの逆袈裟斬りで劉表に襲いかかる。

ガキンッ。

それを煙管で受け止める劉表。

「ちっ」

間合いを取る孫策。そして長剣を正面に構える。

「いつも後ろでふんぞり返ってるわりにはやるじゃないの……」

「カッ。テメエらより俺は長生きしてんだよ。経験が違えんだよ」

「言っじゃないの」

劉表が孫策を見て嫌らしく笑うと、孫策は苦い顔をした。

「どつするよ？怖じ気づいたか、嬢ちゃん」

「まさか……………。はあああ！」

ガキンッ。

長剣と煙管がぶつかり合う。

「カッカッカッ。まあその意気は良し。だが…………」

今度は劉表が攻める。

劉表の武器は煙管。軽い分、手数では勝る。

だが、それでも英傑たる孫策には一撃は入れられない。

「…………ッ！？もらったあああ！」

そして一瞬の隙を突き、劉表の煙管を弾き飛ばす孫策。

「だから、まだまだと言ってたんだよ、嬢ちゃん」

しかし、孫策の次の一撃は目の前に投げ出された劉表の外套で遮られる。

「ちっ。小賢しいの　　ッ！？」

外套を払い除けようとした孫策に天性の勘が告げる。

それは外套を払い除けた先に見えた馬鞭のことである。

それを間一髪のところまで避けることができた。

「はあはあはあ」

自分の頬に血が伝うのを感じる。

「煙管だけで戦うんじゃないの？」

「カツカツカツ。敵の言葉を信用してるんじゃないよ。……さあ、続けようか？」

と劉表は馬鞭を孫策に向けると……………。

「雪蓮様、お下がりください！」

「雪蓮様には指一本触れさせません！」

孫策の前に甘寧と周泰が現れた。

「カツ。……………まあ、これでもよし、か」

と劉表は馬鞭を仕舞う。

「てな訳だ。もう終いだ、武器を納めな、小娘たち。それにテメエもだ……………張允」

いつの間にか後ろにいた覆面の兵に劉表は言う。

「何故です、劉表様！？このような無礼者など……………」

ヒュン。

「聞こえなかったのか？」

覆面の兵　　張允の目の前に馬鞭が迫る。

「御意。出過ぎた真似でした」

シュタツと消える張允。

「テメエらもさっさと帰れよ」

孫策たちを一瞥して、劉表は自分の天幕へと歩を進める。

「……………劉表様」

「黄射か……………何の用だ？」

天幕の外から声がかかり、それに答えると覆面を外した黄射が天幕へ入ってくる。

「これを……」

黄射の手には髑髏を模した煙管があった。

「カツ。別に拾って来ずとも構わなかったがな」

「しかし、これは劉表様にとって……」

「黄射。余計なことは言っんじゃねえぞ」

9話 劉表と孫策（後書き）

次回、劉表の過去がちょっとだけ見えます。

ご意見、ご感想お待ちしております。

10話 それぞれの想い（前書き）

孫堅が出ます。

オリ設定ですが、寛容な心で見てください。

10話 それぞれの想い

虎牢関は曹操と劉備の活躍により落ちた。

そしてその頃、孫策軍陣内では……………。

「う。絶対冥琳怒ってるわよね……………」

「はい」

「だ、大丈夫ですよ。冥琳様も分かってくれますよ……………多分」

甘寧が即答するので、慌てて周泰がフォローを入れる。

「はあ、憂鬱ね……………」

ため息を吐いた孫策。とその時…………。

「雪蓮！」

「ひゃッ。め、冥琳…………。こ、これにはわけがあつて

周瑜の声を聞き、縮こまる孫策。

「そのことは後でいいわ。それよりも…………蓮華様から早馬が来たのよ」

「ッ！？…………それで蓮華はなんて？」

孫権と黄蓋は袁術の目が反董卓に向いている今、孫呉独立への裏工作を頼んでいた。

そして、万が一でも用心を重ねて、孫権にそれは一任していた。

それが袁術に気づかれる恐れがある中で早馬を出したのだ。それはただ事ではないのだ。

「それがどうやら…………邪魔が入ったようだ」

周瑜は周りを確認した。

「蓮華様が偽装一揆の準備をしていた村に突如として警備の増員があつたらしい」

「まさか袁術ちゃんたちが勘づいたって言うの!？」

「いや、それがどうやら袁術の兵でなく……………劉表の兵らしい」

「　　ッ!？」

「……………」

劉表はその手の中にある髑髏を模した煙管を遊ぶ。

「……………テメエの娘はすくすくと育ってやがるぜ」

孫堅。

それはまだ俺が若い頃だった。

「貴方が劉表？」

その声を掛けてきたのは桃色の髪に褐色の肌。そして特徴的なのは
獰猛な獣のような青い眼だった。

誰だ、テメエは？

「私？私は孫堅。字は文台よ」

と孫堅は言った。

孫堅？確か江東の虎か……………。

「あら、私ってそんなに有名かしら？」

孫堅はそうおどけてみせた。

カツ。それでその江東の虎が俺に何の用だ？

俺は煙管をくわえる。だがその頃はまだ吸っている訳でなく、くわ
えているだけだった。

国を治めるのには威厳が必要だったからだ。

「あら、貴方吸わないのに煙管をくわえているの?」

ッ!?

「あははは。貴方、すぐ顔に出るのね」

孫堅はそう言うと俺に近づいてきた。

当時から俺はその悪行から近づくものはいなかった。

「ふうん、へえ……………」

俺の瞳を覗き、孫堅はニヤニヤと笑う。

「貴方、面白いわね。どう?私の元で働かない?」

それが孫堅との初めての出会いだった。

それから何故か、ちよくちよくと俺の前に現れるようになった。

そもそも俺と孫堅は真逆の性格だった。

孫堅は次々と周りの諸侯を併合していき国を大きくした。そして俺は自分の国のみを強くしていた。

孫堅は外へ、俺は内へ。

それぞれが国を想い、行動していた。

時には協力もし、時には敵対していた。

「どう、劉表？私の娘よ。孫策っていうの可愛いでしょ？」

ある日、小さなまだ赤ん坊と言ってもいい子どもを連れて孫堅が現れた。

おい。ここは戦場だぞ？それに今は敵同士だ。

「ええ〜。別にいいじゃない、ちよっとくらい。ほら〜、雪蓮。この強面の癖に真面目なおじちゃん劉表でちゅよ〜」

と子どもをあやす孫堅。

おい。その子、気絶してんぞ。

「あら、ホントね。もう寝ちゃったのかしら？」

「劉表、勝負しましょ」

孫堅はそう言つて長剣を俺に向けた。

カツ。結局はテメエもそういう口か。

俺は何度も人に騙されてきた。そして孫堅もその口だと思つたのだ。

いいぜ。やってやるよ。で俺が負けたら、あれか？国を渡す
でいいのか？

「え？要らないわよ、そんなの。それよりも私は貴方が欲しいわ」

は？

「この辺りも残すところは貴方と私の国になつたもの。今更国がど
うこうなんて言わないわ。それより貴方が私と一緒に来てほしいの
よ」

テメエは何を言つて……………。

「貴方が泥を被つてまで守り続けたものを奪いはしないわ。一緒に
守りましょう。未来の子供たちのために」

そう手を差しのべる孫堅。

俺はその手を。

「……………カッ」

劉表はいつの間にか眠っていたようだ。

「昔の夢かよ。……………胸くそ悪い」

手には煙管が握られていた。

「我ながら女々しいな。あの誘いを断っておきながら、まだ引きずっていやがるのか、俺は」

劉表は煙管に火を入れ、吹かせる。

「どうだ。今じゃちゃんと吸ってるぜ、俺はよお」

その言葉は微かに震えていた。

10話 それぞれの想い（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

11話 裏で動く悪

虎牢関も破り、連合は勢いに乗り、洛陽へ向かった。

だが、洛陽には軍が展開されていなかった。

かといって籠城している様子もない。

それを怪しむ連合は洛陽前で止まっていた。

各陣営が城内に斥候を放ち、情報を集める中、劉表は……………。

「カツ。拍子抜けだな、こりゃ」

堂々と、隠れることなく洛陽を歩いていた。

「董卓は逃げたのでしょうか？」

隣に控えた黄射が言う。

覆面はしておらず、普通の格好である。首の首輪を除けば……。

「これを見る限りはそうだろうよ」

「それにしても袁紹の檄文とは随分と様子が違いますね」

袁紹の檄文では洛陽では董卓の悪政により洛陽の民が苦しんでいるとあったが、市を見る限りそういうことはなさそうであった。

「そりゃそうだよ。あの董卓の嬢ちゃんが悪政なんて敷けるわけねえよ」

「え？それはどういう意味でしょうか？」

「黄射よお、お前は何年俺についてるんだ？董卓とも俺は面識ぐらいあらあよ」

「それでは劉表様は董卓が悪政を敷いていなと知っていて連合に参加なされたのですか？」

「ああ。それに別に俺は連合に与してるわけではないぞ。俺は袁術がついてこいって言うからついてきたただけだからな」

とそこまで言うと劉表が何かを見つけ、前を鋭く睨む。

「……………どうかなさいましたか、劉表様？」

「カツ。どこにでも空気の読めねえやつがいるもんだ。いや、これが世の真理か……………」

劉表の睨む先には黄巾の残党らしき賊たちが町を荒らしていた。

「劉表様、あれは……………」

「洛陽から董卓軍が引いたのを見て、黄巾党の残党が暴れてんだろ
うよ」

そしてニヤリと笑う劉表。

「張允」

「はっ。ここに」

シユタツと現れる張允。

「各部隊に伝える。宮中に侵入した賊どもを狩り殺せ」

「御意」

伝令に走る張允。

「カツカツカツ。それじゃあ、いっちょ反董卓の舞台、派手に血華咲かせて終いにしようじゃねえか」

劉表が懐から馬鞭を取り出す。

そして顔には悪どい笑みが張りついていた。

しばらくして曹操や孫策たちが洛陽へ入城し、復興作業をしていた孫策たちに周泰が慌てた様子で報告に来た。

周泰はあまりに慌てていて要領が得ない。

仕方がないので周泰が何かを見つけた場所へ向かう。

「あそこです。井戸からブワーって……………あれ？」

「何も無いわよ？」

周泰の指差した井戸は何の変わりもない井戸だった。

「でも確かにさっきまでブワーって……………」

「カツカツカツ」

そこに嫌な笑い声が響く。

「テメエらの探し物はこれだろ？」

と屋根に座った劉表が微かに輝く袋を見せる。

「劉表ッ……………」

キツと劉表を睨む孫策に、無言で得物に手をかける周泰。

「おうおう、威勢がいいな。だが今は止めとこうぜ、嬢ちゃんたち」

劉表がおどけてそう言う。

「それよか、これがなんだか気にならねえか？」

と手に持つ袋を見せる。

「気にならないわよ、そんなもの」

「まあ、そう言わずに見てみるよ」

劉表は孫策たちの手前に袋を落とす。

「……………明命」

周瑜が周泰に命じ、袋を改めさせる。

「こ、これは!？」

そして中身を見た三人が驚愕する。

「玉爾……………。何故、こんなものがここに」

「どつやら賊の騒ぎに紛れて持ち出した奴がここに隠したか捨てたみたいだな」

劉表が孫策の呟きに返す。

「劉表殿、何故これを私たちに渡すのですかな？」

油断ならない瞳で劉表を見る周瑜。

「ああん？勘違いは困るぜ、小娘よお。そいつは俺には必要ねえ代物だ。だから次にここにやって来たやつにやるうと思ってたらテメエらがこのこやって来た。ただそれだけだぜ」

劉表はそこで屋根の上に立つ。

「さてと、どうやら賊退治も終わりみてえだな」

劉表の横にはいつの間にか覆面の兵が二人立っていた。

「さて、俺は陣に引き上げさせてもらうぜ。事後処理頑張れよ」

カッカツカツと笑い、どこかへ行く劉表。

「禰衡。情報操作はテメエに任せる」

「え、えっ！？アタシ、ですか？」

後ろに控えた覆面の兵の一人が驚く。

「好き勝手に流して構わねえ。そのお喋りな口を今、有益に働かせ

る

「うう。帰って水浴びしたかったのに」

「ほう。お前はいつも俺に逆らうよなあ？そんなにお仕置きが楽しみなのか？」

ビシッと馬鞭を手の内で鳴らす劉表。

「いえ、滅相ありませんよ。この禰正平、渾身の力を持ちまして
させていただきます」

「最初からそう言やあいんだよ、テメエは」

「……この鬼畜が（ボソボソ）」

「お仕置き決定な、禰衡」

「い、い、ご勘弁をおおお！！」

と走り去っていく禰衡。

「黄射、あれで仕事は確かなんだよな？」

「はい」

そうして劉表は自分の陣へと帰っていった。

洛陽では孫策が玉爾を手にしたという噂と劉表は実はいば持である
という噂が蔓延した。

11話 裏で動く悪（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

12話 奴隸商

反董卓から帰ってきた孫策たち。

洛陽で広めた噂のかいあって人や資金、物資が集まり、順調に軍備の増強が行われていた。

だが、本来なら直ぐにでも袁術に反旗を翻すつもりであったが、細作していた孫権たちを劉表兵が邪魔していたため、思うようにことは運ばなかった。

そして、孫策は徳の高い王として振る舞って……………。

「うう〜ん。部屋に籠ってばかりじゃ体に悪いわよね〜」

と外で体を伸ばしていた。

外と言っても城内の庭ではない。城下の町に出ていた。

「町に出て、民と触れあうのも王の仕事よね。」

「おじいちゃん、いつも元気ね。」

「雪蓮ちゃんのお陰じゃよ。」

孫策はいつものように町のお年寄りと話していた。

「……………あれは。」

そこで孫策は遠目にとある人物を見つけた。

「……………劉表？なんでこんなところに？」

それは劉表だった。なにやら恰幅のいい男を連れて歩いていた。男のほうはなんだか商人風の男で劉表にぺこぺこ媚びへつらっていた。

「どうかしたのかの、雪蓮ちゃん？」

「え、あ。私、用事を思い出しちゃったの。ごめんね、おじいちゃん。私、そろそろ行くわね」

「そうかの。またいつでもこの老いぼれに会いに来てくれの」

「うん。またね」

と孫策は老人に別れを告げると劉表と男の後を追っていった。

二人は段々と人気のない路地裏に入っていく。

「こんなところになにかあるのかしら？」

孫策は気配が悟られないように距離を置いて二人に続く。

そして二人は路地裏の一角に建つ、見るからに怪しい店に入っていた。

「こんなところに店？どう見てもいい店じゃないわよね」

孫策は辺りを警戒しながら、建物へ入っていく。

「これは……………」

孫策が中へ入り見たのは鎖に繋がれた女性たちだった。

歳はまちまちで大人の者からまだ年端もいかない少女までいた。

その全てが服を着ず、生まれたままの姿でいた。

「ここは……奴隷商の店」

眼が虚ろな眼の女性たちを見て、孫策は手が白くなるまで強く握っていた。

「へっへっへっ、いつもありがとっござえやす、劉表の旦那」

恰幅のいい男

奴隷商が下衆な笑みを浮かべる。

「カツ。建前はどうでもいい。例のやつはどうした？」

「へっへっへっ。ええ、ご用意できておりますよ。それにしても劉表の旦那もよいご趣味をお持ちで」

「そこまでよ。下衆が」

孫策が長剣を抜いて現れる。

「なッ!？」

「こ、これはどういふことですか、劉表様!？」

劉表と奴隸商が驚く。

「劉表。アンタのことは最低だと思ってたけど、ここまで屑だったとはね」

孫策の目には嫌悪と侮蔑の念が籠っていた。

「……………」

ただそれを受け止める劉表。

いつものように受け流すわけではなく、受け“止める”。

「カツ」

そしてそれを一笑した。

「おいおい、嬢ちゃんよお。何でここにいるんだあ？」

「アンタをつけてきたのよ」

「そうかい。人をつけるなんていい趣味してんな、嬢ちゃん」

「アンタには言われたくないわよ」

と孫策は鎖に繋がれた女性たちを見る。

「りゅ、劉表の旦那！この人は何なんですか！？」

すると奴隸商が話に横やりを入れる。

「うつせえなあ。俺は今、嬢ちゃんと話して」

「私は孫策よ。この町を治める、呉の王。貴方たちを殺す者の名、しつかりと覚えなさい」

「ひい〜!〜!」

奴隸商は孫策の名前を聞くと顔を真っ青にして店の中に逃げ込んでしまう。

「逃げてても無駄よ」

と孫策が奴隸商を追いかけようとした時……。

「張允」

ザシユ。

奴隸商は後ろに現れた覆面の兵が首筋に針を刺され、声をあげるこ
となく、動かなくなった。

張允は劉表に一礼して、闇に消える。

「そいつを殺せば自分の罪がバレないとも思っているの?」

そして残ったのは怒気を含んだ瞳の孫策と、それを受け止める劉表
だけだった。

「そんなわけないわよね、劉表? 貴方がここでしていたことは私が

知っているもの」

孫策が今までの借りを返さんばかりに言う。

「……していたこと、か」

劉表はそれに嫌な顔一つ浮かべない。しかし、いつもの笑みを浮かべてもいなかった。

「俺がここで何をしていたか、分かるつてのか、嬢ちゃん？」

「分かるわよ。奴隷を買いに来たのでしょ？」

「ああ、確かに俺は奴隷商から人を買いに来てるな」

「今のは自白と受けとるわよ？」

「勝手にしろ。だがなテムエは自分のしていることが何も分かつちやいねえ」

「何を言っているの？」

「ふん……」

と劉表は店の奥に歩き出そうとする。

「動くな！斬るわよ……」

「………ついて来い。言葉の意味を教えてやるよ」

劉表は構わずに歩く。

店の奥は更に酷い有り様だった。

店の表には比較的“出来のいい”商品を置いていた。

そして出来の悪いものは……………。

「これは……………酷い」

まさにそこは家畜小屋だった。

し尿はそこいらに垂れ流し、異臭が放たれていた。

そこにいる女性たちも表と同じ状態であった。いや、更に酷い。

眼が虚ろであるのはもちろん、口からは涎が流れ、まるで呻くかのような声が薄暗い部屋に反響し、まるで亡者が箱の中に犇^{ひし}めきあうかのようなだった。

劉表はその中を眉一つ動かさず歩いていく。

向かう先には木で作られた檻が置かれていた。

中には数名の女性、その中には年端もいかない少女の姿もあった。しかし、眼は虚ろではなく正常。

この中では異質だった。

劉表が前で止まると、中の女性たちがビクリッと肩を震わせた。

「これがなんだか分かるか？」

劉表は振り返らず、言う。

「これはな。俺があ商人から買う予定だった“調教前”の奴隷だ」

「それがなんなのよ……」

「一つ聞くがよ、嬢ちゃん。この後、どうするんだ？」

「貴方を縛にして……」

「違えよ」

劉表の処遇について話し出そうとした孫策を遮る。

「コイツらのことだ」

と鎖に繋がれた女性たちを見る。

「そんなの……」

「助けるってのか？コイツらを……」

と劉表は鎖に繋がれた女性に近づく。

檻に入っている女性たちとは違い、劉表が近づくとき女性はまるで劉表に、男に媚びを売るように体をしならせ、自ら寄せてきた。

「調教済みのコイツらを助けるってのか？もう既にコイツらは駄目だ。人として既に終わってんだよ」

劉表は自分に擦り寄る女性を冷えた視線で見る。

「それをお前は助けれると言っつもりか？」

「それは……………」

劉表の冷えた視線はそのまま孫策へ向けられた。

「俺には無理だな。俺に出来るのは“調教前”に買ってやることしか出来ねえよ」

そう。劉表は好んで調教前のものを買っていた。劉表の悪行は江東には広がっていたため商人たちも怪しみはしなかった。

劉表は劉表なりに奴隷を救おうとしていたと言っことだった。

だが……………。

「でも、そんなやり方は……………」

「最善じゃねえよ」

そう。最善ではない。寧ろ“最悪”だった。

「まあ、俺にはこういうやり方しか出来ねえからな……………」

そういつと劉表は足下の女性をあしらい、再び檻に近づく。

「俺は俺のやり口でやるだけだ……………」

そして檻の鍵を壊し、中の女性を出す。

「黄射、張允。連れていけ」

シュタツ。

二人の覆面の兵が女性たちを連れていく。

「あの子たちをどうするつもり？」

「まあ、素質次第だな。武がありや部隊に入れる。なけりや何か利点を探すさ。折角金出して買ったんだ。有効活用しねえとな」

そして劉表は孫策を見る。

鋭い鷹のような目付きで孫策を見据える。

「俺の罪を問いたきや問えばいい。だがな、俺は俺の行いの、罪の一切を恥はしねえ。それが俺の流儀だ」

それだけいつと劉表は店の奥へ向かう。

孫策はそれを止められないでいた。

下唇を噛み締める孫策。

自分のしたのはなんだったのか？劉表の言い分は暴力的だが、それでも一本の筋が入っていた。

確かにこの場にいる女性たちはどうするのか？完全に壊れた者は普通の社会ではやっていけないわけがない。直る見込みのある者でもそれを直す場が必要だ。そして養う場が必要だ。

だが今の孫策たちにはそこまでの余裕はなかった。

では見過ごすことができるかと言われれば、答えは否だ。

堂々巡りの悪循環が孫策の頭の中を支配する。

「……………それでも私は孫呉の民を守るのよ。母様の意思を継いだのだから……………」

そう呟くのが精一杯だった。

「……カツ。テメエはそれでいいんだ。それでこそ、孫堅の娘だぜ、孫策」

劉表は暗い道を歩きながら言う。

「さあ、そろそろ因縁ってやつも終いにしようや」

暗い、悪逆の道を歩く者はほくそ笑む。

それは歡喜か、自嘲か。

12話 奴隷商（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

13話 悪の花道

多少、計画にズレは生じたものの実行の時は来た。

孫家の宿願。孫家の天下泰平。その先ず第一歩目、袁術から江東を取り戻すのだった。

袁術は孫権、黄蓋の率いた偽装の一揆に騙され、孫策たちに反旗の機会を与えてしまい、呆気なく江東を追われてしまった。

そして、孫策たちが事後処理に追われている中、その凶報が届くこととなる。

「申し上げます！建業の都が占拠されました！」

『 ツ！？ 』

全員に衝撃が走る。

「一体誰が……………まさか袁術が」

孫権がその知らせを聞いて、驚く。

「いや、それは無いわね。張勳と二人だけでそんなことできるはずがないわ」

それを孫策が否定した。

「なら、誰が……………」

「城に旗は掲げられてなかったのか？」

周瑜が伝令に来た兵に聞くと……………。

「そ、それが……………黒地に朱で

『 悪 』と……………」

「カツカツカツ。なあと、油断してんだよお」

劉表が建業の城の玉座で笑う。

「さあ、殺り合おうぜ、孫策よお!!」

カツカツカツと劉表の笑い声が玉座に響く。

「くつ。まさか建業への増兵は細作への警戒でなく、我々が袁術へ
反旗を翻した際に建業を奪うためだったのか」

劉表の兵は建業で動いていた孫権たちに送られたものではなく、こ
のためのもだった。

そして孫策たちが袁術に気を取られている間に劉表は楽々と建業を

手に入れたのだった。

そして孫呉の宿願は建業を取り戻すことから始まるのだった。

劉表もそれを知っているからこそ、建業のみを支配下に置いたのだった。

そして建業にて、孫呉対劉表の戦いが始まる。

「呉の兵たちよ！」

孫策が兵の前に立ち、長剣を抜く。

「長かった袁術の元での苦渋の日々は終わりを告げた。だが、孫呉の宿願は今、始まったばかりだ。そして、最初に立ち塞がったのはあの劉表だ！劉表は我が母、孫堅の眠る建業の地にて決戦を望んだ。ならば我らのやることは一つだ。先王、孫文台の前で孫呉の天下泰平の宿願の第一歩を華々しく勝利で飾ろうではないか！」

『おおおおお！！！！』

「お疲れ様、雪蓮」

「ありがと、冥琳。さあ、ここからよ。まずはアイツを倒して母様

の墓前に晒してあげるわ」

孫策は建業を見て、そう宣言するのだった。

一方、劉表の所では……………。

「劉表様、準備が整いました」

劉表の後ろから黄射が言う。

「そうかい」

それだけ言うと広場に集まっている兵の下へ歩いていく。

「テメエら、よく聞け！」

劉表の怒号が響く。

「テメエらは獣だ！畜生だ！狩るものだ！乱世が居場所だ！戦場が寝床だ！目に見える全てを破壊し、喰らい、散らせ！その目が潰れようが、その腕かひながもがれようが、その足が砕けようが止まるな！保身を忘れる！命を捨てる！敵の悲鳴を子守唄にこの地に眠れ！」

劉表が叫ぶ度に兵たちの雰囲気が変わる。人から獣へ。

劉表隊の強みは覆面による罪悪感の軽減と全ての罪を劉表一人が背負う精神的疲労の軽減。

これらが劉表の異質で異様な“強さ”だった。

「さあ、餌の時間だ、テメエら。劉景升の名の下に全てを喰らってこい。そして血華咲かせて散り行け！」

『うおおお！！！』

劉表の部隊を“狂気”が包む。

「……………さあ、始めようぜ、孫策」

劉表がニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「第一陣、構え！……………放てッ！」

孫策軍の先鋒は黄蓋。

そしてそれに対峙するは……………黄射。

劉表の右腕にして、劉表軍の一番槍。

「前で倒れた物を盾に使い、第二波を防げ！」

右翼には陸遜、周泰。

それに対峙するは……………張允。

劉表軍の筆頭隱密。その実力は……………。

ガキンッ。

「くっ」

周泰と均衡するほどだった。

「劉表様の為、ここは引けません」

左翼には孫權、甘寧。

それに対峙するは……………禰衡。

彼女は諜報隊。基本的には細作に回るのだが……………。

チリーン。

「うひゃああい!!」

武の方は一般兵程度であった。

「あ、当たったら死んじゃいますよおおお!!?」

後曲には控えているのは孫策と周瑜。

呂蒙は各部隊への補給部隊の指揮を任されていた。

「一体何を考えているのかしら?」

孫策は建業に籠らず、部隊を展開した状態で待ち受けていた劉表軍に疑問を持つ。

「あの劉表が何の策もなしに突出しているとは考えにくいわね」

孫策のその“勘”は外れてはいなかった。

「カツカツカツ。さあ、俺の花道、華々しく飾ってもらおうか」

劉表のその言葉と共に城の門が開き、中から……………。

「……………は？何で破城槌なんかが……………」

出てきたのは張勳が大量生産していた攻城兵器を掠^{かす}めてきたものだった。

しかし野戦でそれを使う理由が孫策たちには理解出来なかった。

いや、“理解しなかった”。城攻めに使う兵器を人に対して使うなどと倫理や道徳を無視した考えなどは。

そして、それを孫策たちが理解しようとしまいと関係なく、劉表の殺戮は遂行された。

頑丈な城や関に対して使われる兵器を人に対して使うのだ。人など紙切れ同然だった。

「さあ、血華咲かせる」

13話 悪の花道（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

14話 劉表と孫堅

孫策と劉表の戦いは劉表の忌策により一瞬は揺らいたが、劉表軍のその性質上少数精鋭になってしまふ。

つまりは数が圧倒的に足りなかった。

それを埋めるための奇策であり、忌策でもあるが……………。

それでも勝敗を覆すことは出来なかった。

いや、劉表自身こうなることは分かっていたのだろう……………。

「なにか最後に言い残すことはあるかしら？」

孫策軍は多大な被害を出したが、なんとか勝利を収めた。

そして今、孫策たちの目の前には劉表を含む四人が縛られていた。

『……………』

無言を貫く黄射、張允、禰衡。

そして劉表は……………。

「クツクツ」

笑ったのだった。

「……………何がおかしいのかしら？」

「クツクツクツ。分からないのですか？」

「……………？」

孫策は目の前の劉表に違和感を覚える。

カラン。

『 ツ!?!? 』

そこで劉表の顔が落ちる。いや、正確には顔ではなく仮面だった。

「劉表、じゃない!?!?」

「クツクツ。私は祭壇。劉表様の影ですよ」

劉表は一人、森の中にある小さな墓石の前にいた。

「 「

小さくなにかを呟く劉表。

そして懐から煙管を取りだし、吹かせる。

そもそも劉表には何故、孫堅が自分に近づくのか分からなかった。

ある時、劉表は孫堅に聞いた。

何故、自分に拘るのか？

「うん？何かしらね、強いて言えば勘かしらね」

勘？

「そう、勘よ。貴方が私に力を貸してくれたら孫呉の天下泰平の夢が叶う、そんな気がするのよ」

そういつて笑う孫堅。

無邪気でありながらも魅力的な笑みに惹かれていくのが分かった。

自分に笑いかけてくる人間はどれぐらいいるだろうか？

黄射などは部下としては良くしてくれていたが、それは部下としてのものであった。

劉表と対等な人間などいなかった。

だから、俺は……………。

は？これを俺に？

「そうよ。貴方、いつも煙管をくわえてるでしょ？まあ、別に吸ってないのに……」

うるせえ。余計なお世話だ。

「だから、格好だけでもつくようにこついった装飾のある煙管を持つてた方がいいわよ」

と孫堅が渡してきたのは髑髏の装飾の施された煙管だった。

「うん。よく似合ってるわよ」

正直なところ、俺は異質だった。

俺には他の人間の考えが理解出来なかった。

人を殺すなと教わった。だが戦では殺せと教わった。

それがどうしても理解出来なかった。どうやら俺は生まれてくる時代を間違えたようだ。

それを他人に聞いても明確な答えは返ってこなかった。ただ必要だからと……。

だから俺はその“悪”を肯定した。

そして孫堅にも同じ質問をした。

「なんで人を殺すかって？また変なことを聞くのね。それはやっぱり自分の我が儘じゃないかしら。民の為、家族の為に言うけどね、それって民のせい、家族のせいって言うのと同じなのよね。だから私は自分の我が儘で戦ってるのよ」

清々しいほどの答えだった。

それが正解であるかどうかは俺には分からなかったが、その答えが俺の心に残ったのは確かだった。

そしてその時から俺は“悪”の旗を掲げることにした。

「ねえ、そろそろ私に降ってきてくれないんじゃない？」

カツ。馬鹿なことを言うんじゃないよ。

「もう。意地っ張りなんだから、劉表は」

ならテメエが俺に降ればいいじゃないか。手を貸すのは嫌だが、貸されるのは嫌じゃねえぜ？

「ええ〜。それは私が嫌よ」

もう何度目かになる衝突の時に無駄口を叩く二人。

お互いに認め合うからこそこうして対等に対立しているのだろう。

「じゃあ今日こそ負けを認めさせてあげるわ」

カツ。それはこっちの台詞だ。

そう言って二人は笑い合う。

自分があそこまで他人に入れ込むなど考えもしなかった。

孫堅、俺は……………。

(なんでここにアイツが……………)

孫策は母の墓参りに来るとそこに立つ劉表の姿を見つけた。

劉表の行方は誰一人徹底して口を割らなかつた。

仕方なしに各方面に斥候を放つて搜索していたのだが……………。

(なんで母様のお墓の場所を……………。それにあれは母様が好きだった
睡蓮の花……………)

孫堅の墓石に供えられた睡蓮の花を見る孫策。

(でも丁度いいわ……………)

孫策は長剣を抜き、劉表へ近づく。そして……………。

「やあ、孫策ちゃん。元気そうだなによりだね」

にこやかに劉表が挨拶をしてきた。

14話 劉表と孫堅（後書き）

あらかじめ謝っておきます。次話にて読者の皆様に強い失望観を感じさせるかもしれません。

ご意見、ご感想お待ちしております。

15話 悪の裏側（前書き）

うん。一応、矛盾はないはず……。

いや、未熟な作者故、あるかもしれない。ご指摘していただければ幸いです。

後、一部のキャラがキャラ崩壊が激しいです。

15話 悪の裏側

「どうも、こんにちは。あれ、元気がないぞ？もう一度、
こんにちは。皆様、ご存知でしょうが改めまして。僕は劉表、字
は景升。真名は心こころだよ。今日から孫策ちゃんのために頑張るからヨ
ロシクね」

『……………』

呉の重鎮たちが揃って言葉を失った。

「……………雪蓮。あれはなに？」

「まあ流石の冥琳もあれには驚くわよね」

隣で驚愕している親友に深く共感する孫策。

「私だって母様の墓の前で会ったときは……………」

「やあ、孫策ちゃん。元気そうだなによりだね」

まるで無邪気な子供のような笑みを浮かべる劉表。

「あれれ？どうかしたのかい、孫策ちゃん。お目め、ぱちくりだよ？」

容貌、衣服、容姿、目付き、何一つ変わってはいないはずなのに、ただ口調が違っているだけでどうしてここまで別人になってしまうのか？

「あ、貴方……………劉表、よね？」

とても分かりきったことを聞かざるおえない孫策。

「あはは。面白いことを聞くね、孫策ちゃん。その質問には大手を

振って肯定するよ。僕の名前は生まれてからずっと劉表だよ。そしてこれからも劉表だね」

人をおちよくるような喋り方も同じだ。ただ口調が違う。

「あ、そうそう、孫策ちゃん。やっとのこと袁術ちゃんから解放されたらしいね。これは目出度いね。僕からもおめでとつと言わせてもらいたいね。あはは」

目の前の人物と自分の知る劉表をどうしても重ね合わさらない孫策。

(……………いや、私は知っている？この劉表を……………。小さい頃に一度会っている……………)

「うん？どうかしたのかい、孫策ちゃん。僕の顔に何かついているかな？確か目と鼻と口以外に変わったものをつけた覚えはないのだけれど……………」

顎に人差し指を当てて、首を傾げる劉表。

動作が何故か幼く感じる。これではまるで……………。

「子供みたい、かな？」

「ッ!？」

「あはっ 当たりかな。次はそうだね……………何で分かったんだって顔だね」

まるで心でも読んでいるかのように劉表は言う。

「うん？別に心は読めないよ。孫策ちゃんの顔の微細の動きから予測してるだけだよ。僕は妖術使いでも仙人でもないからね」

「貴方と私は一度会ったことがあるかしら？」

自分でもおかしな質問だと思ったが、孫策はそう聞かすにはいられなかった。

「あははは。劉表としての面識なら一杯あるよ。黄巾の時も反董卓の時も……」

でも、と続ける劉表。

「そうだね。孫策ちゃんが聞きたいのは“僕としての劉表”に会ったことあるか、だよな？それなら僕は首を縦に振るよ。でも会ったのは小さな頃だからあまり覚えていないのも無理はないよ、孫策ちゃん」

そう劉表は言った。

「もう数十年は前かな？孫堅ちゃんがキミを連れて僕に会いに来た時に会ってるよ。」

さてと、と言うと劉表は手頃な岩に腰を下ろした。

「うん？他に聞きたいことがあるんじゃないのかい？どうせだから全部答えてあげるよ」

冥土の土産にね、と劉表は無邪気に笑った。

それは孫策が幼い頃見た母の笑顔にそっくりだった。

「その喋り方というか、なんか性格が違う感じがするんだけど……」

「うん。それは間違いだね。いや、見間違いだね。僕は元々、こんな感じに快活な性格だよ。でもただ口下手なのだよ。照れ屋なしさ。いつも建前で喋って、本音はね、こうして孫堅ちゃんの前でしか喋れないのさ」

「つまり今までののは嘘だったってこと？」

「嘘っていうのは些ちかか乱暴だよ、孫策ちゃん。照れ隠しだとも思っただけかな。人つてのは天の邪鬼だからね。あれをしろと言われればしない。するなと言われればしたくなるものさ。だから僕は兵隊ちゃんに死ねと言っただけ」

死なせないために、そういうことだった。

「じゃあなんで母様に何度も戦を仕掛けたのよ」

「それはね。僕が好きな子には意地悪したくなる質だからだよ」

「は？それってもしかして……」

「うん。僕は孫堅ちゃんのが大好きだったよ」

「……………なわけよ」

「はあ。□下手にもほどがあるわよ」

周瑜が頭を押さえる。まさか孫呉の仇敵の原因がただの色恋沙汰だったなんて誰も予想しなかっただろう。

「まあ、そうなのよね」

「でも悪の旗は何なのかしら？あれも裏の意味があるの？」

「ああ、あれね。ねえ、冥琳。母様の真名、覚えてる？」

「それはもちろんあーれん亜蓮様だろ、ってまさか……………」

「そう。それで劉表の真名が心。つまり“亜”蓮の下についた“心”
”。あれは劉表からの母様への告白らしいわよ」

「なんて分かりにくい……………」

「そうなのよね……………」

「でも何故、劉表はお前につくことになったのだ？」

「ああ、それはね……………」

「それで他に聞きたいことはあるかい？」

「じゃあ、あの悪逆っぷりも建前？」

「うん？いやいや、あれは元々さ。口調なんかは兎も角だけどね。性格までは変わらないよ。僕は人を苛めて楽しむ性癖があることを素直に認めるよ。あ、誤解がないように断っておくけど、苛めるっていうっても意地悪程度さ。体罰とか見てるこっちが痛いからね」

口調は本来は荒くはないが、性格は元からドSらしかった。

「それじゃあ、最後の質問よ。……………なんでここに居たの？」

そして孫策は本来の疑問に戻る。

「祭壇に貴方の影役までやらせて逃げたのに何故まだここに居るのかしら？」

「うん。当然の疑問だね、それは。でもそれはまず、前提が間違っているのさ」

「……前提が？」

「まずは僕は逃げるために祭壇に僕の影を勤めてもらったわけではないのさ。僕はここに来るために祭壇に皆の目を引いてもらったのさ」

「何のために……？」

「それは決まってるじゃないか、孫策ちゃん。死ぬためだよ」

軽く。いとも軽くそう言った劉表。

まるで少し外に出ていくみたいに劉表は自分に死の宣告をした。

「いや、これも少し語弊があるね。正しく言うなら殺される為に、かな」

あはっ、と笑う劉表。

「まあ、殺される相手は誰でも良かったんだけどね。うん、孫策ちゃんが出来てくれて良かったよ。僕の考えた中で最も善い最後だよ。最善だね」

「貴方、殺されるためにここで待っていたって言うの？」

「うん？そう聞こえなかったかい？その通りさ。寸分の狂いもなく、疑う余地もなく、徹頭徹尾、その通りだよ」

さあ、とヒョイツと岩から下りる劉表。

「孫策ちゃん。僕を殺してほしい。君にはその権利があるし、義務もある」

両手を広げた状態で孫策へゆっくり近づいていく劉表。

そして孫策の持つ長剣を掴み、自分の胸へ心臓へ持っていく。

「ほら後はずぷりとするだけだよ、孫策ちゃん」

「……………」

孫策は無言で長剣を振りかぶる。

そして……………。

パンッ。

「殺さないわよ……………」

それは平手打ちだった。

「え？い、いや、それはダメだと思っけど……………」

その行動はどうかやら劉表の予想外だったらしく、平手打ちされたことを突っ込むことすら忘れる劉表。

「だって、今ここで貴方を殺したら多分私、母様に怒られると思うわ。だから殺さない」

そう言つと鞘に長剣を納める。

「その代わり、貴方には孫呉の為に身を粉にして働いてもらつたよ」と劉表に手を差し出す孫策。

それはまるで母、孫堅のようであった。

15話 悪の裏側（後書き）

どうでしょうか？

あのままでは劉表が死ぬエンドが見えてしまい、救済措置としてこうなったのですが……………。

無理がある？許容範囲内？

皆様の意見次第では打ち切りエンドもやむ無しかと……………。

皆様のご意見、ご感想お待ちしております。

辛辣なものでも構いません。

16話 隠居

僕は劉表。

ちよっと口下手で、人に意地悪するのが好きな健全な男の子さ。

うん？文句は受け付けないよ？そんな人はお尻百叩きの刑だゾ？

前は袁術ちゃんの客将。今は孫策ちゃんのところでお世話になってるよ。

どうやら僕は死んだことになってるみたいなのさ。だから僕は名を捨てて、真名である心として日々を生活している。

僕の隊は解体されて孫策ちゃんたちの軍に吸収されたい。

そう言えば黄射たち四人娘は何故か僕の侍女を希望しているらしい。

まあ、確かに謀反の企てをされてはいけなからね。兵を持たせることはできないのだけど、なんで僕の侍女？

そう聞いたら……………。

「鈍いです」 黄射

「鈍感」 張允

「クツクツ」 祭瑠

「ニブニブですよ」 禰衡

と言われましたよ。とりあえず最後の禰衡はイラツときたのでお仕置きしときました。

……………てな感じが今の現状というところなのさ

「誰に言っているのですか、心様？」

黄射が劉表に突っ込む。

「ついに頭が壊れたんだよ、心様は」

「うん？お仕置きを希望と受けとるべきかな、禰衡？」

「ちょ、違いますってば！」

「いや、否定しながら涎を出すという器用さに僕は驚きだよ」

禰衡、ドM疑惑浮上。

「そういえば心様、口調が変わりましたよね」

何故か悶えている禰衡を無視して張允が言う。

「うん？そういえばそうだね。まあ、なんだか気持ちが悪くなった
と言つべきなのかな」

「そちらの方がお似合いですよ、心様」

と黄射がお茶をいれる。

「そうなのかな？自分ではよく分からないかな」

それをズズツと飲む。

「心、居るかしら？」

「おや、孫策ちゃん。どうかしたのかい？」

ある日、孫策が劉表の部屋を訪れた。

部屋と言っても隔離された半監禁状態の劉表であった。

「あれ？黄射たちは居ないのね」

「うん？皆、用で出てしまっているよ」

「そう……」

と手近な椅子に座る孫策。

「今日は何が聞きたいのかな、孫策ちゃん」

にこやかに笑う劉表。

今、劉表はここに住み、孫呉のために知恵を貸している。

孫堅との戦い、そして乱世を生きた劉表のその経験は重宝とされる

ものだった。

呉ではご意見番のようなことになっていた。

「今日は母様のことを聞きたいのよ」

「うん？孫堅ちゃんのことかい？別に構わないけど、僕なんかより孫策ちゃんの方が詳しいんじゃないかな、母娘おやこなんだしさ」

「私には見せなかつた母様の顔を聞きたいのよ」

「……………そうかい」

それから小一時間程劉表は話す。

それは他愛もない話だった。

「失礼するよ」

話を終えた頃にもう一人劉表の下を訪れる者がいた。

「おや、今日は珍しいね。お客さんが二人も来るなんて……………。そ

れでキミは何のようかな、周瑜ちゃん」

訪ねて来たのは周瑜だった。

「ああ、ちよつと聞きたいことがあつてな。それと……………我が主が仕事をサボっていないか確認をしにな」

と周瑜は孫策を見る。

「あ、あははは……………」

冷や汗を流す孫策。

「べ、別にちよつと休憩してただけよ。さ、さあ仕事に戻ろうかな……………」

そくそくと部屋から出ていく孫策。

「さて、少々お聞きしてもよろしいか、心殿」

「 カツカツカツ。構わねえよ。そのために俺を困ってんだろ？存分に利用してくれや」

そこには悪い顔をした劉表がいた。

劉表が本音で喋るのは孫策と四人娘がいる場合だけだった。

「すつぱりと切り替わるものだな」

「カツ。それで聞きたいことってのはなんだ？まさか、テメエも孫堅の話聞きに来たわけでもねえよな？」

「孫呉のこれからについて、いや……大陸のこれからについて意見を聞きたい」

「大陸のこれから、か……。いよいよ、孫呉の宿願とやらが見えてきたみたいだな？」

「ええ。それで心殿はこれからどこの勢力が残るとお思いか？」

「ふん。まずは魏の曹操だな。あれは間違はなくこれから先、敵として立ち塞がるだろうぜ。後は……劉備だな」

「劉備……。確かに雪蓮も彼女には一目を置いていたわね」

「その二国とそして孫呉の三国で大陸の覇権は争われるだろうな」

「それに我らは生き残れると思うか？」

「残る残らないの問題じゃねえだろ？生き残らなきゃならねえんだろ。ならなりふり構わず利用できるもんは利用して意地でも勝ち残ればいい。それが仇敵の知恵でもな。カツカツカツ」

劉表は快活に笑うのだった。

そこには悪どいだけの笑みでなく、まるで孫たちを見守るような優しさも少しは含まれていたのだと思う。

その後も劉表は孫呉のためにその経験からなる知恵を絞りだし、乱世において珍しく天寿を全うしたのだった。

こうして悪を掲げた将は前線から姿を消した。

そして呉は強大な後ろ楯を手に入れた。

16話 隠居（後書き）

と言うわけで劉表は前線から外れます。

今後はおそらく拠点イベントで構成されると思います。

ご意見、ご感想お待ちしております。

17話 とある老將との会話

「……………う、うん？」

太陽の光が顔に射し、劉表は身動きをする。

「心様、朝です」

「……………今、起きます」

黄射の声が耳に馴染む。毎朝これが日課であった。

「心様、お着替えを」

「ん……………」

劉表が手を伸ばすと慣れた様子で衣服を着替えさせる黄射。

伊達に側役を志願したわけではなかった。

「心様、朝食お持ちしましたよ」

と扉を開けて、無駄に回りながら入ってきたのは禰衡。朝食を乗せたお盆を持ちながら……。

「こら、禰衡。はしゃぐんじゃないよ。溢したらどうするのですか？」

それを隣に居た祭瑠がたしなめる。

「大丈夫だよ、祭瑠。こんくらいへっちらあああああ!？」

シュタ。

案の定、盆は宙を飛んだが、唐突に現れた張允のナイスキャッチにより朝食は無事であった。

「……………どうぞ」

とそのまま何事もなかったかのように朝食を劉表に渡す張允。

そしてそれを何事もなかったかのように食べる劉表。

「あ、禰衡はお仕置きだからね」

「す、すみませんでしたああああ」

とこれが劉表の朝の風景だった。

朝食を終えた劉表は基本的に読書に勤しむ。

それは兵法書ではなく、物語だ。

別に前線から引いたために兵法を学ぶ必要がなくなったとかではなく、既存の書物は粗方読んでしまったために物語を読んでいるのだった。

「ふう。この書物も終わりに近いね。次は何で暇を潰そうかな」

劉表はぼそりと呟く。

「外を出歩ければ何かしらあるのですが、室内に限定すると選択肢が狭まります」

それに黄射が答える。

「まあそうではあるけどね。そうだ、禰衡。何か面白いこととしてくれない？」

「ええ！？アタシ、ですか？また無茶振りを……………」

こうして禰衡を弄るのが日課になりつつあるようだ。

「心は居るかの？」

「うん？その声は黄蓋ちゃんかい？うん、居るよ」

外から声をかけられ書物から目を離す劉表。

「少し時間はよいかの？」

「うん、大丈夫だよ。基本的には僕は暇だからね」

「そうか。にしても主のその口調はやはり違和感があるの」

「そうかい？確か黄蓋ちゃんは何度か“これ”で会ってるはずだ
どね」

「確かに堅殿と居るときはその口調だった気はするがの」

「あはは。もう物忘れがヒドイのかい？」

「どうやら儂も歳には勝てぬみたいだの」

ハハハツと笑い合う二人。

「って誰が歳じゃ！？まだまだ儂は現役じゃわい！！」

とノリ突っ込みを黄蓋がしたかは、読者の想像にお任せしよう。

「それで黄蓋ちゃんは何か用があつて来たんだよね？まさか老後を楽しむ僕の話し相手になりに来た、とは考えにくいからね、現役の黄蓋ちゃん？」

「うぐつ。お主の前じゃと調子が狂いっぱなしじゃ」

「じゃあ、お茶でもどうかな？黄射」

「はい。どうぞ、黄蓋殿」

ずっと後ろに控えていた黄射が動いて、お茶を黄蓋に出す。

「おお、すまぬの……………」

とそれを黄蓋が啜ると……………。

「大丈夫ですよ、毒なんて入ってませんから」

ブーツ!!

「あちゃあああああ!!」

劉表が要らぬことを言ったお陰で黄蓋がお茶を吹き出し、あまつさえそれを襦袢が浴びるというコントを披露したのだった。

何時如何なる時も全力で楽しむ。劉表は昔からそんな男だったことを熱さに悶える襦袢を見ながら思い出す黄蓋だった。

「の、のう。あれはあのままで良いのか？」

と黄蓋が床に転がる襦袢を指差す。

お茶がかかり粗方転げ回った後にあそこで止まったまま立ち上がらない。微かに震え、ハアハアしていた。

「気にしなくていいよ。今は余韻に浸ってるところだからね」

劉表は一目も見ずにそう答えた。

「そ、そうなのか。最近の若い者は分からぬの……」

それは多分、ごく一部の局部的な人物なのだが、それを訂正するほどの良識を持った人物はここにはいなかった。

「それで？さつきは聞きそびれちゃったけど、黄蓋ちゃんは何の用だい？」

話を大いに逸らしたのは劉表自身なのだが、今それを突っ込めばおそらく話は永遠にできないだろうと思う黄蓋。

「実はの、劉表に新兵どもの調練をしてほしいのじゃ」

「うん、いいよ」

「……………は？」

二つ返事で返ってくるとは思ってもおらず、黄蓋は間の抜けた声を出してしまった。

「なぐんでね。嘘、嘘。話も聞かずに引き受けるなんてしないよ、僕は。でもまあ、ちよつとは興味あるよ、その話」

にこりと笑う劉表。

本当に興味があるのか、それともただの暇潰しか真偽は計れないが、黄蓋は事の詳細を話すことにした。

「実はの……………」

「今後のために新兵を強化したい、かい？」

黄蓋が何か言う前に先回りするかのように劉表がにこりと言う。

「そ、その通りじゃ。じゃが今後と言っても……………」

「それは目先の戦いや魏との戦いだけではなく、それ以後のためにも、かな？」

「……………分かっておるのなら聞かないでほしいの」

「何を言うのさ、黄蓋ちゃん。それじゃあまるで僕が全てを見透かしてるみたいじゃないか。よしてくれよ、僕は神や仙人じゃないんだよ？そんなことできるわけないじゃないか」

と劉表はにこやかに言うのであった。

「うん。でも大体は理解したよ、黄蓋ちゃん。僕は新兵と言っても大勢を見るわけでなく、新兵を訓練する将を見ればいいのだね」

「……………お主。実はこの話、冥琳辺りから聞いておったじゃろ？」

一を聞いて十を知る、どころか百や千まで理解する劉表に黄蓋は驚く。

自分たちが本当にこの男に勝ったのかすら疑わしくなってしまう。

「うん？周瑜ちゃんは何も言ってくれないよ？彼女の中でもまだ迷ってるみたいだね。そんな遠慮することないのね。使えるものは使うべきなんだよ。ボロ雑巾のように使い捨てればいいのね」

と同意を求めてくる劉表。

劉表は呉のために己が全ての力を使って尽力する。例え自分の身を

切ってでも……。

「お主は本を書く気はないのかの？」

「うん？本かい？なんで？」

「いや、お主の知識を書に示しておけば何かと便利ではないかと思つたのだがの」

「黄蓋ちゃんは何か勘違いをしてるね」

「勘違い、とな？」

「うん。僕は別に知識豊富ってわけじゃないんだよ。それこそ周瑜ちゃんよりも少し多い位だと思つよ」

「では何故、冥琳はお主の知を借りるのじゃ？」

「それはね……知識ではなく“知恵”を借りたいんだよ」

と劉表は言う。

「うん？同じじゃないのか、って顔をしてるね、黄蓋ちゃん。それは違うよ、間違いだね。いや、認識の違いなのかな。知識とは潤沢な情報のことさ。そして知恵はその情報の使用方法なのさ。情報だけでは十全とはいかないよね。情報とは用法、用量を守って正し

く使わなくてはいけないからね」

過度な情報は身を滅ぼすよ、と劉表はつく加えた。

「あはつ。余計に分からなくなった様子だね、黄蓋ちゃん。うん、
だろうね。これで理解してくれたと言っなら僕は黄蓋ちゃんにご褒
美のちゅーでもあげたくなくなるくらい感激するよ。うん、良かったよ。
いや、別に黄蓋ちゃんにちゅーしないのが良かったっというわけじ
ゃないんだよ？今から説明することを考えた昨日の晩の僕の労力が
徒労にならなくて良かった、とそう言っ意味だからね」

冗談か本音が分からない。

全てが嘘みたいで、全てが真実のようでもあった。

「簡単に言っならね、黄蓋ちゃん。ある場所に行きたいとするよ」

と劉表が言っくと張允が簡易な地図を取りだし、机に広げた。

「黄蓋ちゃんは今、ここに居る」

とある一点に石を置く。

「そしてここに行きたいとする」

少し離れた場所にもう一つ石を置く。

「さあ、黄蓋ちゃんなら、どう進む？」

「どっつと言われてものっ……。っつ、としかいいようがないの」

と石と石を一直線に結ぶ黄蓋。最短距離である。

「ならこの間に崖があるとするなら？」

劉表はその線を遮るようにする。

「ならば迂回するであろう」

「うん、そうだよ。それが正解。それが知恵さ。つまり目的地がここだと知っている。そしてそこに行くまでの直線距離には崖があることも知っている。それらを踏まえた上で最善の道を導き出す。これが知恵なのさ」

分かったかい、と笑いかける劉表。

「うむ。なんとなしには分かったの。じゃが最初からそれで説明してくれば良かったのう」

「あはは。それじゃ駄目だよ」

「何故じゃ？」

「それじゃあ、黄蓋ちゃんの困った顔が見れないじゃないか」

「お主は……」

呆れたように頭を押さえる黄蓋。

「まあまあ。うん、将の育成は受けるよ。周瑜ちゃんにも伝えてお

いてね。僕はいつでも暇だからってね」

「あい分かった」

「あはつ。別に鍛えるべきは次代を担う将だけではないのさ。黄蓋
ちゃんに周瑜ちゃん、それに孫策ちゃんも……。あははは。楽し
みだなあ、君たちはどんな面白い顔をしてくれるのかな？」

黄蓋の去った部屋の中で劉表はそう言って無邪気に笑う。

17話 とある老将との会話（後書き）

うん？なんだろう……彼我木輪廻みたいにするつもりが病院坂黒猫さんみたいだ。

もしくは球磨川かな？

ご意見、ご感想お待ちしております。

18話 次代へのたすき(前書き)

3日ぶりの更新です。

毎日更新が……………崩れた。

18話 次代へのたすき

「やあ、こんにちは、甘寧ちゃん、周泰ちゃん」

劉表は孫策に連れられて調練場に来ていた。

劉表の前には甘寧と周泰がいた。

「……………」

「……………こんにちは?」

甘寧は無言。周泰は一応返した。

「うん？元気がないよ？さあ、もう一度……」

「いや、いいわよ。二人とも聞いてると思うけど今日から心の指導を受けてもらうわ」

劉表を遮り、孫策は改めて二人に今回の主旨を説明する。

「雪蓮様、私は納得いたしかねます。何故、劉表からなのですか！
？今まで通り祭様から良いではありませんか！？」

そう言ったのは甘寧だったが、周泰も概ね同じ意見のようだった。

「たまには違う相手に教わるのもいい経験よ」

「ですが……」

「思春。一度だけでもいいわ。それで必要じゃないと思えば今後こんなことはしないわ。だからお願い……」

「……雪蓮様がそこまで仰るのならば、これ以上は断れません」

「ありがとね、思春。明命もいいかしら？」

「はい！」

「それじゃあ、心、お願い……って何してるのよ？」

そこには地面にのの字を書いて、いじける劉表がいた。

「いえ、別に……」

基本的に“構ってちゃん”な劉表であった。

「さて、何か教えてほしいことはあるかな、お二人さん？」

劉表はにこやかにそう言った。

「……………ない」

そして甘寧は無表情にそう答えた。

ちなみに孫策は後ろで三人を見ている。

「ふむ。そうかいそうかい。若いねえ、甘寧ちゃん」

あはっと笑う劉表。

「あれだろ、甘寧ちゃん。僕を今一信用できない、いやもつと根本かな？そもそも許せないってとこだろ？うん、分かるよ、その気持ちは」

うんうんと頷いて見せる劉表。

一々芝居臭い男であった。それは故意か、天然か……………。

「うん。ならば最初の講義だ、先ずは打ち解け合わなくてはいけないよね。そこで……………打ち込んできていいよ?」

劉表は馬鞭を構える。

「何を言っているのだ、貴様は?」

「うん?甘寧ちゃんはあれだろ?僕が自分を教えるのに相應しい武を持っていないと思っっているんだろ?うん。全くもってその通りだ。だからこそ打ち込んできてくれて構わないよ」

ほらほらと馬鞭を横に揺らす劉表。

「君は武で劣る僕に勝つことはできないのだからさ」とにこりと笑う劉表。

「ッ!?……………舐めるなよ」

チリン。

甘寧が得物を抜き、構える。

「じゃあ、最初の講義を始めようか」

そう言っつて劉表は馬鞭をヒュンツと鳴らす。

それはさながら指揮者のように……………。

甘寧の戦い方は速さ重視、手数重視の戦法だった。

対して劉表はそれを捌くのに手一杯。

端から見ればそう見えるだろう。

だが本人たちからすればそれは違った。

それは刹那の差ではあるが、劉表の方が一步先に動いているのである。

甘寧が攻撃を打ち込むところには劉表の馬鞭が初めからそこにあるのだ。

甘寧からすればまるで自分の攻撃が全て馬鞭に吸い込まれているかの如く感じるだろう。

いや、実際そうなのだ。甘寧は知らずの内に劉表が故意に作った隙に打ち込まされているだけだった。

まるで動きを指揮されているかのように……。

「あはは。やっぱり甘寧は速いねえ。うんっん、僕なんかでは追いつけないよ」

と全て防ぎながら言う劉表。

「くっ」

「うん？勘違いしないでくれよ、甘寧ちゃん。別に速さが追いつけないって言ったわけじゃないんだよ？君の武に追いつけないって言ったのさ。悲しいことに才能の違いなんだよね。うん？なら、何故当たらないのかって顔をしてるね、甘寧ちゃん。それは簡単なことだよ」

と劉表は自分と甘寧の間にヒュンツと馬鞭で線を引く。

「僕と君とでは立ってる位置が違うんだよ」

「貴様、馬鹿にしてるのか！？」

「うん？……ああ、言葉が足りないよね、これは。言い直すよ、甘寧ちゃん。僕と君とでは立ってる意志が違うんだよ」

「意思、だと？」

「甘寧ちゃんは勝つために立ってるだろうけど、僕は負けないために立ってる。ただそれだけの話なんだよ。簡単だろ？」

「何を言ってるのだ、貴様は？」

「うん？分からない？あはは。そうかいそうかい
なんだね」

君は馬鹿

ブチリッ。

何かが切れる音がした、気がする。

「……………」

無言で甘寧の殺気が濃くなる。

それに対して劉表は……………。

「あはっ」

笑っただけだった。

「す、凄いです!」

劉表と甘寧の戦いを観戦していた周泰が声を上げる。

甘寧の攻撃は更に速く、鋭くなる。

しかし、劉表はそれをいよひ尽く捌いていくのだった。

それはまるで全てに筋書きがあるかのよう……。

「……………」

孫策は無言で二人を注視していた。

何かを見定めるかのように……………。

そんな苛烈な戦いもそう長くは続かなかった。

ガキンッ。

飛んだのは……………馬鞭だった。

しかし甘寧の得物は止まらず、劉表の首へ吸い込まれるかのように迫っていった。

「……………そこまで……！」

ピタッ。

寸前のところで止まる。

「思春、もういいわ。剣を収めなさい」

孫策が止めなければ確実に劉表の首は飛んでいただろう。

甘寧も無言で得物を収める。

「あはは。流石は甘寧ちゃんだね。今のは僕でも死を覚悟したよ」
と平気で嘯く劉表。甘寧の得物が迫る中、劉表は更に笑みを深くしていたのだった。

「思春。心との鍛練続ける意味はあるかしら？」

「……………」

無言で劉表を見る甘寧。

「勝った気がしないかい？」

「ッ！？」

端から見れば甘寧の圧勝に見えるだろう。だが当の本人はまるで負けたかのような感覚に襲われていたのだった。

「あはつ。まあ、そうだろうね」

と劉表は飛ばされた馬鞭を拾いながら言う。

「それがどうしてなのか、それは自分で見つけることが重要だからね、甘寧ちゃん。それに今後も孫権ちゃんを守るならこれは知っておくべき答えだよ。うん、大丈夫さ。君なら近い内に見つけられるさ」

「……………次は勝つ」

それだけ言い残して、甘寧は調練場から立ち去った。

「“次”ねえ……。あはは」

「それで心、今の戦い方は何なのかしら？」

「うん？気になるのかい、孫策ちゃん？あれは簡単さ。言ったただろ、僕は負けないために立ってるって。勝つためじゃない、負けないため、さ。分からないって顔だね。そうだろうね、君たちはそうだろうね。でもね、知っておいてくれよ、孫策ちゃん。目的のためには目的を捨てる覚悟も必要だと言っことを………」

18話 次代へのたすき（後書き）

作者、風邪になりまして、構成があやふやに……。一応修正はしたつもりですが、何かありましたらお気軽にどうぞ。

ご意見、ご感想お待ちしております。

19話 四人娘

劉表には四人の侍女が付いている。

四人とも元は劉表の部下である。

一人は黄射。劉表の右腕として前線指揮を任されていた人物だ。

傍目から見ると彼女は何でもこなせる秀才キャラ、なのだが………

「ふにゃあッ!?」

ガシヤンッ。

「黄射、またですか？」

隣に居た張允がため息を吐きながら黄射が散らかした書簡を拾う。

「貴女は本当に心様の目の届かない所になると途端に駄目になりま
すね」

「張允！私はそんなことはないと言っへやあ！」

ふたたび
二度転ぶ黄射。

一応、注記しておくが何も無い平地である。

「う、うう……。違うのだ、これは……」

「言い訳はいいですから、早く起き上がって下さい。下着見えてま
すよ」

「ひゃわッ」

バツと飛び起きる黄射。

「はあ」

ため息を吐く張允。

黄射。彼女はとても優秀である。

ただそれは劉表の目の届く位置だけのことではあるが……………。

張允。彼女は劉表隊にて諜報活動を主として行っていた。その実力は呉の最精鋭、周泰にも劣らない。

「張允！私はそんなことはないと言っへやあ！」

彼女の隣で黄射が派手に転ける。

今日、二度目となるそれを見ながら張允はため息を吐く。

「言い訳はいいですから、早く起き上がって下さい。下着見えてますよ」

何やら言い訳を言い出した黄射に興味無さそうに張允が言つと黄射は慌てたように起き上がる。

「あ、書簡……………」

と散らかしてしまつた書簡を拾い、集めようとする黄射。

「もう拾つておきましたよ、黄射」

と既に拾つた。もつと言うなら黄射が転んで飛んでいるのを空中で全てキャッチしていたものを見せる張允。

「うう。お世話になりました」

「いえ、別に」

申し訳なさそうに頭を垂れる黄射に素っ気なく言い返す張允。

彼女にとってこれくらいは日常だつた。

黄射は勿論、祭壇のフォローも彼女の役目であつた。

劉表侍女部隊の苦勞人、張允であつた。

「それにしても何故、黄射は心様に仕えているのですか？」
書簡を運びながら張允は何気なしに聞いた。

「……………何故、そのようなことを聞くのですか？」

「別に他意はありませんよ。貴女が心様至上主義なのは知っていますが、何故そうなったか経緯をしりたいと、そう思っただけですよ」

世間話です、と張允は言う。

「父が仕えていたから……。初めはそうでした。しかし、父が心様の意に反して孫堅殿を討った。その際、私は心様のお側にいました」

「確か貴女が前線指揮になったのは黄祖殿が亡くなってからでしたね」

「そうです。私が自ら望んだのです。もう二度と心様の意に添わないことをさせないために……。あの時の心様はとても悲しそうにいえ、あれは落胆……。でしょうか。そういったお顔をされていました」

だから私は、と黄射は前を向く。

「心様の望みは全て叶えるために前線に立ち、お側に控えさせていただいているのです」

「……………」

張允は心の中でごちそうさまでした、と呟いた。

「それでは早く参りましょうか」

「ええ。心様をお待たせしてはいけませんにゃあああ！！」

「はあ……」

書簡を盛大にぶちまける黄射を見て、張允はため息を大きく吐く。

今までの書簡の移動距離……二歩であった。

「心様の話題では駄目、と……」

「むきゅ」

黄射のドジをどつすれば直るのか？目下調査中の張允だった。

「何でアタシだけが無茶ぶりされるのかな？」

劉表侍女隊の一人、禰衡。DM疑惑濃厚な少女である。

劉表の暇潰しによく無茶ぶりをされて、遊ばれるのが彼女の役目になりつつあるこの頃。

「それは貴女が喜ぶからではないですか？」

「ええッ！？アタシ、喜んでるのッ！？」

自覚は無いようだった。

「そうですね。いつも嬉しそうに頬を緩ませています」

祭瑠。彼女は工作人員の一人で主に変装し潜入を得意としていた。

「そ、そうなのか。これからは気を付けなくちゃ……………」

パシッツと頬を叩き、気合いを入れる禰衡。

「……………クックッ」

「……………？どうかしたの、祭ほ」

急に笑った祭瑠の方を向こうとした禰衡だったが後ろから押され、川へ落ちてしまう。

幸いにも川は子供でも足がつく深さであるため溺れはしない。

「ちょッ、何するのさ、祭瑠!?」

とおそらく自分を落とした犯人であろう人物の名前を呼ぶが、答えたのは……………。

「クツクツ。誰に向かってものを言ってるんだ、テメエは」

そこに居たのは劉表だった。いや、劉表の仮面を付けた祭瑠だった。

「こ、心様あく……………って違う違う。あれは祭瑠だ。心様じゃないんだ」

一瞬頬を緩ませた禰衡であったが直ぐに頭を振り、正気に戻る。

「なんだあ？俺に逆らうってのか？これはお仕置きが必要だなあ」

祭瑠は禰衡の顎に指を置き、笑う。それは劉表にそっくりな悪どい笑みであった。

「あ、ああ。だ、だめえ、心様じゃないって分かっているのにい」

祭瑠。工作員で変装が得意。ドSな気があり、そして若干、百合っ気があった。

「うん？僕が最も重宝する人材かい？うん、中々際どい質問をするね、周瑜ちゃん」

劉表の部屋で孫策と周瑜が談話していた。

「うん、あえて順列を付けるのだとするなら、僕は禰衡を一番に持つてくるだろうね」

「あら、意外ね。黄射や張允ではないの？やっぱりそれは貴方の性癖を満たしてくれるからかしら？」

禰衡の体質（ドM）は最早、周知の事実であった。

「あはつ。面白いことを言うね、孫策ちゃん。確かに僕は苛めるのが楽しい人間だし、彼女は苛められるのが楽しい人間だけだね。僕はそんなことで人材を選んだりはしないよ。ちゃんと能力で選んだ結果さ」

「能力ねえ……………」

そう言われても二人にはドM以外浮かばなかった。

「工作人員としても祭壇程ではないし、隠密としても張允程ではない

し、武や指揮にしても黄射程ではないな」

「まあ、そうだろうね。彼女の能力は分かりにくい。いや、認識しにくいのかな？どちらにせよ、それは意識してしまえば容易いことだよ」

「勿体ぶらずに早く教えなさいよ、心」

「あはは。勿体ぶってるつもりはないのだけどね。まあ、こういう性格だと理解してもらえないかな。おっと、また話がそれているね。うん、単刀直入に言おう。僕としては珍しく、事も無げに、さらりつと言うよ。彼女は噂好きなのさ」

『……………は？』

「あはははっ。うんうん、まあそんな顔をするだろうと思っていたよ。でもね、これがとても正確で、核心をついていて、補足の必要も無いくらいに真実なんだよ」

まあ百聞は一見にしかず、と劉表は扉の方を向く。

そして丁度扉が開き、祭瑁と禰衡が洗濯から帰ってきたのだった。

「くくくく」

「ツヤツヤ」

帰ってきた禰衡はべそをかいていて、祭壇は何故かお肌がツヤツヤだった。

「お二人ともお疲れ様。……お楽しみだったのかい？」

二人を見てにこやかに言う劉表。

「うう、アタシもうお嫁にいけません」

と禰衡が言う。

「まあ、その時は祭壇に貰ってもらいなよ」

「そ、そこは僕が貰うよって言うところですよ、心様あ」

そんな劉表と禰衡のやり取りを見る孫策たち。どう見てもただの弄られキャラにしか見えない。

劉表もそれを理解してか、一度孫策たちを見て、にこりとする。

「そうそう、禰衡。また新しい噂は聞いたかい？」

「え？いきなり何ですか、心様？まあ、話していいなら話しますけど………」

と一瞬だけ不思議な顔をした禰衡だったが話し出すと……。

「そうですね……新しいのと言えば東の市のあの焼売店の主人の子

どもがですね

「

と次から次へと噂話が溢れてくる。

やれどこの夫婦が喧嘩したあの、やれどどこどこに美味しい飯店が開いたあの、どれも巷に流れる噂ばかりであった。

「あ、そうそう。孫策さん」

といきなり孫策へと話を向ける禰衡。

「周瑜さんを閨に誘うのはいいですけど五回戦までするのは駄目ですよ。次の日の朝、周瑜さん辛そうでしたよ?」

『ッ!?!』

二人が驚く。それは機密とまではいかななくても、それなりに人が知らない秘密である。しかも周瑜が辛そうだったと禰衡は言うが、周瑜がそれを周囲にバレるように振る舞うだろうか?

どんな場合においても自分の感情を隠し通してこそ軍師というものである。

それが見破られていた、というのだろうか?

「後はそうですね。もうそろそろ蜀から同盟の申し出がありそうですね。後、二日もすれば来ますから、周瑜さん使者を送らなくても良さそうですね?」

「ッ!?!?」

これには周瑜が驚く。

確かに近々蜀へ同盟の申し出をしようとしていたが、それはまだ誰にも言っただけではなかった。それこそ孫策にも……。

「禰衡、何故それを知っているのだ？」

「え？ 噂に聞いただけですよ？」

周瑜の問いに禰衡はただそう答えた。

「ね、一番重宝するでしょ？」

と劉表はにこりと笑う。

「彼女の情報収集能力は群を抜いてるのさ。それこそ大陸中の噂を知っているほどに、ね」

それは脅威と言えるものだった。

禰衡は勿論、呉の地から……いや、劉表の近くから遠出はしていないはずだった。なのに遠くの蜀のことまで彼女はまるで聞いてきたかのように知っていた。

戦に情報は必要不可欠である。その情報を誰よりも早く、正確に集められる。それが彼女の能力であった。

まあ、要らぬ噂話が大半ではあるが……。

ただのドMではなかったのだ。

劉表侍女隊。個性様々、一癖二癖もある面々であり、敵に回せば厄介であるが味方に回しても扱いが難しい。

しかし、それをまとめあげる劉表は相当のくせ者であった。

19話 四人娘（後書き）

劉表侍女隊の裏設定でした。

ご意見、ご感想お待ちしております。

20話 独白(前書き)

注

この話を読む前に……………。

先ずは目を休めて下さい。

目を軽く揉むなどをしてリラックスをして下さい。

読んでいる途中にも休憩を入れるなどをして下さい。

暗い部屋で携帯で読むのはなるべく避けて下さい。

20話 独白

「うん？僕の生い立ちかい？それは聞いていて面白いとは言えないものだよ？……それでも聞きたいのかい？そうかい、それなら話すのもやぶさかではないよ。前にも言ったけど僕は元々快活でお喋りな性格だからね。とは言え、生まれて間もない頃は物心もないからね、記憶というものがないんだよね。うん？そこまで遡さかのぼらなくてもいいのかい？あははっ。それもそうだよ。それでどこから聞きたいのかな？……うん？孫堅ちゃんとの出会いかい？いや、それは別の機会に話してしまっているんだ。え？なんのことか分からないって？それはそうさ。完全に私事だからね。でも……うん、そうだね。これは完全にのろけ話になるんだけど……いいのかい？そうかいそうかい、聞き手がそういうのであれば僕も喋るのはやぶさかではなく、大手を振って話せるってものだよ。そうだね、何から

話そうかね……………。彼女は僕のこの喋りを最初から気に入っていたみたいだったね。大概の人間は僕のこのしゃべり方は嫌な顔をす
るけど、孫堅ちゃんは最初から笑っていたよ。そこからもしれな
いね、僕が孫堅ちゃんに惹かれたのは……………。そうなると僕の心は
初めから孫堅ちゃんに捕らわれてしまったみたいだね。うん？どう
かしたのかい、孫策ちゃん？まるで親の初恋を聞いているような顔
をしているね。勘違いしてもらっては困るから一応、断っておくけ
ど僕だって恥ずかしいんだよ？それでも君たちが聞きたいと言うも
のだから僕も恥ずかしいのを我慢して話しているのさ。うん？そう
は見えないって顔をするね。あはははつ。それはそうさ。僕は顔に
は表情を見せないからね。昔から得意なんだよ？こうやって本心を
隠して振る舞うのつてね。まあ、でも分かる人には分かるみたいだ
ね。孫堅ちゃんや曹操ちゃん、それに劉備ちゃんも少し気づいてる
風に思えたけどね。まあ、それはどちらにしても構わないことなん
だけどさ。うん、閑話休題だね。僕は話がよく逸れるからね、その
都度修正しないといけないんだよね。君たちも僕が逸れだしたら言
つてくれよ。おっと、これも逸れているね。ううんと、どこまで話
したのかな？そうそう、孫堅ちゃんの話だったよね。どうなのかな、
あれは僕の初恋だったのかもしれないね。いや、そんな顔を赤らめ
ないでくれよ。話しているのは僕なんだよ？どうも、君たちはこの
手の話には初なみたいだね。君たちも女の子なんだから耐性はある
と思っただけだね。うんうん。確かに今はそういう浮いた話を
している時期でないかもしれないけどね。でもやっぱりそういうた
ことには興味はあるみたいだね。あはは。恥じることはないさ。人
の三大欲求でもあり、種の保存は生物の性だからね。うん？ああ、
話が逸れたね。うん、ありがとね、周瑜ちゃん。それで孫堅ちゃん
についてだっけかな？ううん、とは言え僕よりも君たちの方がよく
知ってると思うからね。話せることと言えば……………そうだ。この煙
管は孫堅ちゃんに貰ったんだよ。……………え？そういうのはいいって？
なに？武勇伝的なもの？……………無いよ。皆無だよ、そんなのは。だ

つて僕は武将ではなく、指揮官なのだからね。なら戦術？いや、それもあまりないかな……。基本、僕は負けないことが前提の逃げの爲の後手だからね。相手は僕を最後まで逃がさなければ勝ちなんだよ。だから、僕に戦術も何も無い……。つて、君たちなんて顔をしてるのかな？あはは。もしかして僕が何かを見通して動いてると思っていたのかい？それは間違いだね。事実は何も考えていない。行き当たりばつたりの出たとこ勝負。意味深な言動はただの癖なのさ。おや？なんだい、皆一斉にため息なんて吐いて。幸せが逃げてしまつよ？そうだね。僕としてはこれでも真剣に、真面目にしているつもりなんだけどもね。そう真面目にふざけているのさ。……。あ、うん。冗談なんだけどもね。あはは。息をするように冗談を言つ、それが僕なのさ。お調子者なのさ。そして気分屋だ。しかも我が儘ときてる。全く手に負えないよね。うん？どうかしたのかい、孫策ちゃん？まるで自分が言われているかのような顔をしてるね。あはは。勿論、今言ってるのは僕自身のことだよ。完全なる自嘲なのさ。うん？どうかしたのかい、黄蓋ちゃん。まだ話は終わりではないのだけれど……。ああ、そうかい、廁かい。これは失礼したね。そうだね。大分時間も経ってしまったているし、この辺で休憩でも入れようか。うん？なんだか、皆嬉しそうだね？あはは。そんな顔をされるとなんだか　苛めなくなつちゃうじゃないか。あ、そうそう。廁に行く振りをして、この場を去ろうなんて考えても無理だからね？そんなことをすれば……。あはは。まあ誇りある孫呉の將の方々がそんなことをするわけないよね。さあ、続きは皆が廁を済ませてからにしようか……。うん？いいのかい、黄蓋ちゃん。なんだいその顔はまるで凶星を言い当てられたかのような顔だね。……。では話の続きをしようか。それでどこまで話したかな？うんと……。あれ？全く進んでない？そうだね。僕の話は初めの場所をぐるぐる廻る。迷走もいいところさ。まあそんなところも孫堅ちゃんには面白がっていたよ。僕が言つのもなんだけど、変わった人間だったよ。まあ、そうだね。そこも僕が孫堅ちゃんに惹かれた理由

かもしれないね。戦場において彼女は笑っていたよ。それは戦闘狂に見えるのかも、でも僕はそうは見えなかったよ。ただ楽しいのさ。理由も根拠もなにもないんだよ、ただ純粹に、ただ心のままに楽しんでたんだよ、生きることが……。僕なんかは違ふよ？僕が笑うのは癖なのさ。若しくは自嘲かな。あはっ。ああ、僕はもしかしたら憧れていたのかも、もしれないね。うん？これもろけだね。うん、そうだね、話を換えようか。さっきは戦術はあんまりないと言ったね、そして負けない為の後手とも言ったね。それが僕の理^{ことわり}さ。分かるかい？僕には勝利条件がないのさ。うん？それは不利なだけじゃないのかって？いやいや、違ふよ。寧ろ有利なのさ。だって僕は守るだけでいいのだからね。うん？分からないかい？じやあ例を挙げて説明しよう。もしも君たちが僕と戦う。そして僕を討ち取ったとしよう。でもね、その時、僕は君らの王、つまり孫策ちゃんと相討ちになった。さて君らはこれを勝ちとできるかい？うん。例え話さ、例え話。それでは駄目だろうね。つまり君たちは僕を討ち取り、尚且つ孫策ちゃんを守らなくてはいけない。つまりは攻と守に力を二つに割らなくてはいけない。だけと僕は守のみに力を置けばいい。これはかなり違ふと思わなかい？あははっ。流石に軍師ちゃんたちは気付いたみたいだね。でも納得できないって顔だね。それはそうだね。僕のこれは停滞だからね。君たちみたく進む人間にはあまり賛同できない考えだろうね。うん、それでいいよ。だからこれは僕の理さ。でも、そうだね……心の端には覚えておくといいよ。僕みたいな考え方をする人間がいることをね。うん？どうやら陽も傾いてきたみたいだね。それじゃ、そろそろ僕は戻るところかな

「……………雪蓮、何か言うことはないか？」

「……………ごめんなさい。まさか本当に夕方まで喋るとは思わないじゃない……………」

この発端は劉表が喋り出したら丸々1日は話し続けることができると孫策が聞いてきたことから始まる。

それが本当かどうかと調べようと言い出したのが孫策だった。そして話を聞きつけた者、若しくは孫策に引っ張ってこられた者が集まり、講談会が開かれたのだが……………。

まさか朝から夕方まで本当に喋り続けるとは思いつかなかった。

20話 独白(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

21話 毒矢(前書き)

一応、連稿。

でも短い……………。

21話 毒矢

蜀から正式に同盟の使者が来た。しかしそれと同時に曹操が孫呉へと侵攻を開始したのだった。

これにより孫策たちは先ずは自力で曹操たちを跳ね返さなくてはいけなかった。

そしてそんな中、孫策は母の墓参りに来ていた。

「母様、もうすぐ孫呉の宿願が叶うわ」

曹操をここで抑え、そして劉備と共に曹操を討ち、天下を二分とする。それが蜀からの提案だった。

「蓮華や亞莎たちもすくすく成長して、これなら私の後も呉は安泰よ」

それはまるで自分がこの乱世を生き残れないかのような言い草だった。

「ねえ、母様。なんで母様は劉表に拘ったの？それだけはまだ分からないわ」

孫策は孫堅の墓に水をかける。

「……………もし私もそっちに行ったら教えてよね」

そして孫策の後ろからは矢が迫っていた。

「正直なところ間に合うかどうか微妙なんだよね」

劉表が森の中を走っていた。

「あ、勝手に抜け出してきたから僕、怒られるかも……………」

そんなことを言いながら劉表は走る。目的地は孫堅の墓、孫策の下へ……………。

「……………母、様……………」

「あはつ。僕は性別的には父親なのだけどね」

孫策がいつの間にか気を失い、倒れていたようだ。

「なんで……………心がここに……………」

孫策が起き上がろうとするが……………。

「ああ、駄目ですよ。孫策ちゃんは毒矢に射られたんだよ。あまり無理をしちゃいけないよ」

と劉表が止める。

「そう。私、ここで死ぬのね……………」

孫策は諦めたように体から力を抜く。

今更だが自分が劉表に膝枕をされていることに気づく。

「できれば宿願を叶えてから逝きたかったわ……………」

「 うん？解毒はしたよ？」

「……………はあ？」

ガバツと飛び起きる孫策。

「なんで？心、解毒薬を持ってたの？そんな都合よく？」

詰め寄るように孫策が劉表へと問う。

「うん？そんなパターンもあるかなって思ってね。一応用意しておいたのさ」

「……………え？ぱた……………なんて言ったの？」

「おっと。これはこの時代の言葉ではなかったよね。あはっ、可能性って意味さ」

そう言い直した劉表。

「まあまだ毒は抜けきってないのだから、休むといいよ、孫策ちゃん」

と言って劉表は孫策の前に手を翳す。

「ちよつとまだ私は……………何も、聞いて……………な、い……………わ……………よ」

すると孫策は目を瞑り寝てしまった。

「うん。本当は僕が孫策ちゃん代わりに毒矢に射たれるってのが最善だったんだけどね。まあ、本来っていうのが正しいのか知らないけど、このイベントは呉へ北郷くんが降りてきた時に起こるはずだからね。だから一歩出遅れちゃったよ。まあ孫策ちゃんは救えたりよしとしようかな」

「心様……」

「黄射かい？」

「孫策殿を暗殺しようとした者を捕らえました」

「そう、ありがと。直ぐ行くよ」

と劉表は孫策をその場に優しく寝かせる。

「それじゃ後はよろしくね」

とそこで少し止まる。

「あ、そうだ。一つ言い忘れたことがあるね」

と劉表はにこりと笑うのだった。

「僕は別に転生者で未来の知識があるってわけではないんだよね。自分じゃない自分を過去に持っているわけでもないよ。僕にはそんな設定は無いし、その可能性も僕は今ハッキリと否定しておくよ」

とそれだけを誰に言うわけでもなく呟いて、劉表はその場を去る。

21話 毒矢（後書き）

意味深に伏線を張ってみるテスト……。
実はもう一つの伏線と合わせると衝撃の事実が……。とか言ってみるテスト。

分かるかな？分からないかな？

あまり言つとネタバレなので、この辺で……。

ご意見、ご感想お待ちしております。

22話 余生を楽しむ者

曹操軍は撤退した。それは孫策の暗殺のことが要因だった。

本来の流れでは孫策は毒死するはずだったが、“偶然”居合わせた劉表により助かったのだった。

そしてその劉表といえは……………。

「うなッ！？ちよつと待つた、周瑜ちゃん」

「またですか、心殿？これで何回目ですか？」

「うぬぬぬ」

周瑜と将棋をしていた。

「あらら。こつぴどくやられてるわね」

盤上を横から眺めながら孫策が言う。

「うぬぬぬ。前にも言ったけど僕は逃げるのが専門なのだよね。盤上の決められた範囲内ではそれができないんだよ」

と劉表は両手を挙げて、降参の意を示す。

「ふふ。これでまた私の勝ちというわけだ」

「あのさ、外を自由に出してくれるのはとてもありがたいのだけどね。別に僕の相手までしなくても構わないのだけど………」

そう。劉表は孫策を助けた功績から半監禁状態から解除され、自由な外出が許可された。

「何を言うのか、心殿。私たちは好きで貴方の相手をしているのですよ」

「そうよ。こんな美人に囲われた余生なんて幸せじゃない」

と二人が劉表に詰め寄る。

「……………ゴホン」

「あら、お目付け役が帰ってきちゃった」

「孫策殿、周瑜殿。お二人は暇な身なのですか？」

そこには黄射がいた。

「いや、今は休憩していたところだ」

「休憩、ですか……………。ではそろそろ戻られてはどうでしょうか？」

それは暗に帰れと言っているかのようだった。いや、実際に言っているのだらう。

「何よお、別にいいじゃない。ねえ、心？」

毒矢の一件以来、何故か劉表に近づくことが多くなった孫策。

「うん？仕事があるならした方がいいよ、孫策ちゃん」

だが、当の劉表はそんなことを気にする様子はなかった。

「ぶーぶー。何よ、冥琳だって遊んでるじゃない。なんで私だけ言われるの？」

「え？聞いてきたのは孫策ちゃんだから孫策ちゃんに返したただけだよ。周瑜ちゃんもそろそろ戻るよね？」

「……………ああ、そうだな」

と将棋の盤を仕舞う周瑜。

「また相手をしてもらうからな」

とそれだけを言って周瑜は孫策を連れていった。

「うん？僕はいつ周瑜ちゃんのフラグを立てたのかな？」

「？」

「いや、独り言さ。さて、調練場にでも行くか。今日は甘寧ちゃんたちを見ようかと思っていたんだよね」

「はい。お供します」

と劉表は調練場を目指す。

「あ、心さん。こんにちわ！」

「……………フン」

周泰は劉表を見つけて頭を下げて挨拶し、甘寧は鼻を鳴らしたただけだった。

孫策を助けてから、呉の将たちの態度が柔らかくなった。

甘寧は相変わらずではあるが……………。

「やあ、元気がいいね、周泰ちゃん。それに甘寧ちゃんもこんなにわだね」

「ふん。何しに来たんだ？」

「うん。君たちの訓練を見ようと思ったのさ」

「別に貴様に見てもらわずとも我々はきちんとやっている」

「あははっ。ホント元気がいいね、甘寧ちゃん。個人でやるのは大いにいいよ。でも他者を交えると更に効果的だとそう思わないかい？」

「……………」

「あはっ」

仏頂面の甘寧ににこやかな劉表。

「まあ、そうだね。今日は周泰ちゃんを見ようか……………」

「え？私ですか？でも……………」

と周泰は甘寧を見た。

「…………別に好きにすればいい」

とそれだけ言うと甘寧は自分の調練に戻ってしまった。

「良かったのでしょうか、心さん？」

「うん？何がだい？」

「い、いえ。何でもないんです」

「…………あまりフラグの乱立は良くないと思うんだよ、僕は」

「え？何か言いましたか、心さん？」

「あはつ。何でもないよ。さあ、始めようか、周泰ちゃん。ほら、打ち込んできてごらん」

「あははつ。速いね、周泰ちゃん。でもまだまだ単調だよ？実と虚を上手く組み合わせることをオススメするよ」

「はい！」

劉表と周泰の鍛練を横目で見ている甘寧。

自分でも不思議なくらい劉表が気になる。しかしそれが恋愛感情によるものかと聞かれれば、それは些ちかか怪しかった。

別に甘寧が武術一筋で恋愛に対して耐性がないとかそう言うわけではなく、どうも自分の抱く感情は恋愛のそれとは違う感じがするのだった。

「気になりますか、甘寧さん？」

「ッ!？」

いつの間にか後ろに立っていた張允に驚く甘寧。

「貴様は……………」

「張允と申します。心様の侍女を勤める者です」

律儀に礼までして自己紹介をする張允。

「甘寧さんは気になるのですね、心様が」

「何を言っているか分からないな。私は鍛練中だ。邪魔をするなら立ち去ってもらおう」

「分からない、ですか。…………では独り言を言いますので聞き流して

下さい」

と張允は前振りをしてから喋り出す。

「私は元は諜報活動を主にしていました。それは私が人の感情の機微に敏感に反応するからです。昔から人を観察するのが好きな変な少女でした。そんな私から見ても心様は異常でした。あの方は人を惹き付けるわけでもない、魅了するわけでもなく、ただ

弱さを見抜く、そう張允は言った。

「そしてその弱さを肯定するのですよ。それはとても甘美で魅力的な誘惑です。そしてそれは中毒性があるのですよ。相手に自分を依存させる。それがあの方の本質。それを理解した上でも私はあの方から逃げられない。気づいていても逃げられない」

まるで蜘蛛の巣みたいなんです、と張允は呟く。

「甘寧さんも気をつけて下さいね。おっと、これは独り言なんです。これは失礼しました。それでは私はこれで」

と張允は礼をするとスッと消える。

残るは胸に霞のかかった甘寧だけだった。

「あれでよろしかったのですか？」

「うん、上出来だね。ご苦労様、張允」

周泰の訓練も一段落して休憩している劉表の横で張允が報告をする。

勿論内容は先ほど甘寧に話したことだ。

「それでは私はこれで」

「心様……」

張允と入れ替わり、竹筒を持った黄射がやって来る。

「何故、あのようなことを？」

「うん？甘寧ちゃんのことかい？」

竹筒を劉表に渡しながら黄射が聞く。

「ちょっとした実験さ。まだまだ長い余生だからさ、ちょっとした余興もなくちゃつまらないだろ？」

「……………そうですね」

「それに甘寧ちゃんがデレたパターンはまだなかったからね」

そういつてにこりと笑う劉表。

「またよく分からない言葉を使いますね、心様は」

「あはっ。さてと……………周泰ちゃん。そろそろ再開するよ」

と劉表は再び、周泰の調練を見るのであった。

22話 余生を楽しむ者（後書き）

どうも、ラストへどう繋げるか迷っている作者です。

ラストのオチは決まりました。しかしそれにどう繋ぐかが問題です。できる限り自然な流れを意識してはいますが……いや、もう劉表の激変により流れも何もあってないようものなのですけどね。

おそらく残り五話もないと思います。残り僅かですが、お付き合いいただければ幸いです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

23話 ……あはっ。

正式に蜀と同盟を結び、いよいよ魏との決戦が目前まで迫る。

そして蜀の面々も呉へと入り、戦の準備を始めていた。

「お久しぶりです、孫策さん」

「ええ、反董卓以来かしらね、劉備」

玉座の間で孫策が劉備たちを迎える。

「聞きました、暗殺の件。大変でしたね」

「大事には至らなかったし、それで曹操も一時的に退いてくれたし、得した気分よ。まあ、もう一度したいとは思わないけどね」

「それはそうですね」

と雑談をする二人。

「雪蓮……………そろそろ戦の話をしたいのだけど？」

「はいはい。冥琳は固いわね」

と周瑜が言つと蜀との意見交換が始まった。

一方、劉表は……………。

「……………」

唇間っから酒を呑んでいた。

「ぶはっ。うん。美味しいね、この老酒」

「当たり前じゃ。儂の秘蔵の酒じゃぞ」

一人ではなく、黄蓋。そして四人娘と呑んでいた。

「あはっ。それには感謝だね」

チンツと陶器を打ち鳴らす劉表。

「のう、心。聞きたいことがあるのだが……………」

「うん？なんだい黄蓋ちゃん、改まって。構わないよ、“その為のお酒”なんだろう？」

クイツと杯を煽る劉表。

「うむ…………。あのな、劉表……………あれはあのままで良いのか？」

と黄蓋が指したのは四人娘。正確に描写するなら……………。

「うう〜、心しゃま〜。わたしは、わたしは……………うう」

「ちよ、張允飲み過ぎだぞ……………」

「これりゃ、飲まじゅにいりゃれりゆきゃー！」

張允が酒を瓶ごとツッパ飲みをするのを黄射が止め…………。

「こ、こら、禰衡！どこを触ってるんですか！」

「ムフフ、祭瑠は柔らかいですね〜」

いつもとは逆に禰衡が祭瑠を襲っていたり…………。

一部抜粋ではあるが、混沌^{カオス}であった。

「う〜ん、いいんじゃないかな。楽しそうだし……………」

「ま、まあ、お主が言うのなら良いのじゃが……………」

「それで？ “本題” は何かな、黄蓋ちゃん？」

とにこりと笑う劉表。

黄蓋は改めてこの男の笑みが感情からくるものでないことを思い知らされる。

劉表自身も言っていた通り、これは癖なのだろう。

日常では分からないほど自然で呼吸をするように当たり前のことなのだ。

酒の席で初めて分かる。この自然なほどの笑みが不自然であると…………。

相手が酔っているからか、微妙な綻びが見えるのだった。

「……………心。お主はこの戦、どう見る？」

「普通にやれば、孫策ちゃんたちが負けるのは火を見るより明らか
な」

笑みを浮かべたまま劉表は言う。

「そう、普通にやれば、ね……………」

と黄蓋を見る劉表。

「老体に鞭打つのは感心しないよ」

それはまるで見透かすような口調であった。

そう、黄蓋が離反を装い、火計を成功させようとする……………。

「……………何のことが、分からぬの」

「あはつ。ただの酔っ払いの戯れ言さ」

クイツと杯を空にする劉表。

「……………。それにしてもお主はそうも簡単に変わるものなの」

話を逸らすためか、黄蓋はそう言った。

「前にも言ったが、やはり儂にはその口調は慣れんよ」

「……………」

そこで劉表の表情が変わる。いや、空気が変わったのだ。表情は常に笑みの形を保っている。

「それは違和感ってやつかい、黄蓋ちゃん？」

口調も表情も何一つ変わっていないはずなのに、黄蓋は背筋が凍るような感覚に陥った。

「教えてほしいかい？それを感じた理由……………」

「こ、心、お主は何を言っているのだ？」

黄蓋は喉が渴くのを感ずる。酒で酔っていた頭が一気に醒めていく。

「全く、黄蓋ちゃんだけなのかい、僕に違和感を持ったのは……………」

普通は人がこつも変わるのをおかしく思うものだけどね」

劉表は笑みのまま愚痴る。

まるで後ろで他の者が喋っているかのように視覚と聴覚の感覚が噛み合わない。

「うん？おかしいかい？それはそうだろうね。というかよく気づかなかつたねと言いたいよ、僕は」

あははと笑う劉表。おかしくもないのに笑う、面白くもないのに笑う　　苛立たしくても笑う。

「僕の名前、言ってみて、黄蓋ちゃん」

「何を訳の分からぬことを……」

「いいから言ってみて。さん、はい……」

「……劉表であろうっ？」

訳が分からずも答える黄蓋。

「ハズレだよ」

そして劉表はそう答えた。

「何を言っておるのだ。耄碌せうろくしたか？」

「しないよ。僕は黄蓋ちゃんより随分と若いんだから……」

「はははっ。何をぬかしておるのじゃ、お主は儂や堅殿と同世代で

はないか」

「それは “父様が”、だよ」

劉表は いや、目の前の男はそう答えた。

「覚えてないかな？僕は一度会ってるんだけどね。 僕の名前は劉ソウ。劉表の息子だよ」

カラン。

黄蓋の杯が手から落ちる。

「全く、本当に父様と僕の区別もつかないなんてね。主要キャラはモブキャラを正確に認識しない。父様の言っていたことは本当だったんだ……あはっ」

ため息を吐くように笑う劉表、いや、劉ソウ。

「初めは僕も信じてはいなかったんだけどね。僕らの生きる世界が一つの物語で僕らはその登場人物だ、ってね……。それに父様が転生者だなんて。あははっ、憂鬱だよね。これで父様の言葉は正しかつたことが証明された。つまりは僕は世界にとって主要キャラではなく、背景のようなモブキャラなんだって」

目の前で淡々と笑みを浮かべて喋る男を黄蓋の脳は既に理解を放棄したかのようにあやふやに認識していた。

「うん？別に悲しくないよ。ただ虚しいね。僕も父様も世界にとっては代わりの利く、いや、無くてもいい存在なんだよね、あはは」

「い、一体いつからお主だったのだ……………」

意識せずにそんな言葉が出た。

「いつから？決まってるじゃないか……………僕になった時だよ」

それは建業を劉表が占拠した時。孫策が孫堅の墓の前で見つけた時。

「それにヒント……………ええと、手掛かりはあつたはずだよ。僕のとを彼女たちは一度も劉表とは呼んでいないんだよ」

と劉ソウは四人娘たちを見る。

その言葉に呆然となる黄蓋。

「そ、それじゃ、本当にお主は……………」

それは世界を崩壊させかねない言葉。自分達の存在意義そのものが揺るぎかねない言葉。

「 あはっ。な〜んてね 」

「 ……は？ 」

「 あはははっ。騙された？騙されちゃった、黄蓋ちゃん？ 」

にこりと笑う劉表。それはさっきまでの不自然さはなく、自然な屈託ない笑み。

「 冗談だよ、冗談。さっきも言ったじゃないか、酔っ払いの戯れ言だって…… 」

と劉表は黄蓋の杯を拾うとお酒を注ぐ。

「 あはは。ホントに美味しいお酒だね。いい気分で酔えるよ 」

と劉表の喉に酒が流れ、黄蓋の背中には嫌な汗が流れる。

「 ……一体いつから冗談だったのじゃ？ 」

「 うん？そんなの 」

始めからだよ、とにんまりと笑う劉表。

23話 ……あはっ。(後書き)

はい、すみませんでした。

つい出来心でした。

次回は赤壁に入るか、蜀と絡むかのどちらかです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

24話 苦手なもの(前書き)

今日はまだ終わっていない!

24話 苦手なもの

孫策たちが軍を纏めて、決戦の地 赤壁へ移動を開始するまで後5日となった日。

劉表はいつもの通り……になりつつある甘寧、周泰の調練を見ていた。

ガキンッ。

周泰の得物を馬鞭で受け止める劉表。

そしてそれを払い、後ろから来た甘寧の刃を打ち払う。

「あはは。後、ちょっとだったね、甘寧ちゃん」

二人は肩で息をしているというのにも関わらず、劉表は余裕そうにそう言う。

劉表は基本的に動かない。

始めから受けに徹して最低限の動きと力で対処しているのである。

甘寧や周泰も同じように最低限の力でやっているのだが、やはり守りのみに力を使う劉表の方が有利だった。

「あはつ。二人とも、だいぶ良くなってきたね」

一息いれて、休憩をしていると劉表はそう言った。

「はい。毎回ご指導ありがとうございます、心さん」

お礼を言う周泰。

「うんうん。……それで、甘寧ちゃんは何か掴めそうかい？」

「……………ふん」

とそっぽを向く甘寧だが、今では文句を言う数は減っていた。

「うんうん。重畳、重畳」

うんうんと首を縦に振り、満足そうな笑みを浮かべる。

「すまないが、我らも鍛練に加えてもらって構わないだろうか？」

そこへ蜀の武将たちがやって来たのだった。

「うん？」

と蜀の武将たちに背を向けていた劉表が顔を向けると……………。

「お主は劉表！？生きていたのか……………」

と面識のある武将、関羽、張飛が劉表を見て驚く。

それは孫堅の仇である劉表を孫策が生かしているとはよもや考えてもいなかったからである。

更に劉表は前線から身を引き、つい先日まで半監禁されていたのだ。

討ち取られたと考えられるのが妥当だろう。

それに驚いた要因はそれだけではない。

「あはつ。やあ、関羽ちゃんに張飛ちゃんはお久しぶりだね。後の皆さんは初めまして。僕は劉表、字は景升。真名は心だよ」

その豹変っぷりにも驚く。

「何故、真名まで？」

真名を軽々しく扱うかのような劉表に対して関羽が怪訝そうな顔をする。

「特に理由はないけど、強いて挙げるなら君らが英傑であるからかな」

と嘘か実か判断しにくい劉表。

「まあ、気にしなくていいよ。それで関羽ちゃんたちは鍛練しに来たんだよね？」

「ああ」

「ならウチのとやるかい？いつも同じ相手だと飽きちゃうでしょ」と劉表が指したのは甘寧や周泰。それに黄射たち、四人娘たちだった。

「ハアアア！」

「はいはいはい！」

金属と金属のぶつかり合う音が調練場に響く。

呉と蜀の将、そして劉表侍女隊が変わり変わりに打ち合っていた。

「うんうん」

それを見ながら劉表は頷く。

「何を見ているのですかな、劉表殿」

とそこへ汗を吹きながら趙雲がやって来た。

「うん？……次世代を担う若き将たちが育む姿ですよ、趙雲ちゃん」

煙管を吹かせながら劉表は答える。

「それにしても貴方の侍女たちは強いですな。将としても優秀だ。何故、侍女をやらせておるのですかな？」

「別にやらせているわけではないですよ。彼女らは自ら侍女をしているの啦」

「ほほう。……愛されておるのですな」

「さて、それはどうでしょうね……」

劉表は今、まさに関羽と打ち合う黄射を見る。

「彼女らのそれは愛情や親愛とは違つと思つよ」

「では何だと？」

「あはつ。それは……………教えないよ」

と劉表は煙管を懐にしまう。

「趙雲ちゃん、一手指南してあげるよ」

煙管の代わりに馬鞭を取り出す劉表。

「これはこれは、ありがたい。江東の虎、孫堅と雌雄を決した劉表殿が直々に御指南いただけるとは」

趙雲は槍を持ち、調練場の真ん中へ行く。

「あれは……………星と劉表」

興味深そつに関羽が呟く。

「心様？」

そして黄射もそちらを向く。

「さあ、一手御指南いただきましょうか」

「うん、いいよ。どこからでも掛かっておいで………と言いなが
らも僕からいつてみたりしてッ!」

「クッ!?!」

劉表の馬鞭がしなる。

「あはっ、流石は趙雲ちゃん」

「いきなりですな、劉表殿」

「実践に近い方がいいからね」

と距離を取る劉表。

「さあ、次はいいよ。ドンと胸を貸そう」

劉表はクイクイっとして手で招く。

「では、いきますぞ。………はいはいはいはい!」

趙雲の突きが劉表に迫る。

そしてそれを受け止める……………と見せかけて体を引き、それをかわす。

「……………受け止めてくれるのではないのですか？」

不服そうに口を尖らせる趙雲。

「うん？そんなこと言ったかな？あはは。年のせいで忘れっぽいんだよ、僕は」

「劉表は戦う気があるのか？」

劉表の初撃以外攻撃に出ず、逃げてばかりの戦法に関羽が首を捻る。

「心様にとって取るに足らない相手、ということですよ」

それに答えたのは黄射だった。

「攻撃は最大の防御と言いますが、その防御すら不要。そういうことです」

劉表至上主義の黄射の歪曲ではあるが、概ね当たりでもあった。

攻めは相手を負かす目的が大きいが、相手に攻めさせない目的もある。

る。それをせずに守りに徹する劉表。

それは裏を返せば、相手に攻められても守りきれからでもあった。

「あの方から言わせれば経験こそが全てなのだ。経験さえあればどんな凡人でも天才に負けることはない」と

そう言う黄射の劉表を見る目は憧れを通り越し、狂信とも言えるだろう。

「あの方に出来ぬことはありません」

とそこまで言う黄射だった。清々しいほどに……。

(確かに。黄射の言葉は流石に言い過ぎな気もするが、アイツに苦手があるとは思えないな)

隣で聞いていた甘寧もそう思っていた。

「あらあら。なんだか楽しそうなことをしてるわね。私も混ぜてもらえるかしら?」

とそこへ黄忠が顔と魏延を連れて現れる。

「はあはあはあ。……………紫苑か。悪いがまだ私の番でな。後にして
もらおうか」

趙雲が黄忠にそう言って劉表に向き直ろうとすると……………。

「ボク、オシゴトガアルンデシタ。ソレデハ、マタ」

と今にも駆け出していくポーズを取った劉表がそこにいた。

「……………は？劉表殿、いきなりどうなされ」

「それでは、御免！」

駆け出していく劉表。

ヒュンッ。

だがそれは一本の矢に阻まれる。

「あらあら。人の顔を見て逃げ出すなんて失礼しちゃうわ」

矢を放った張本人、黄忠は笑みを浮かべたまま劉表に近づく。

劉表は矢で服を地面に縫い付けられ動けずにいた。

「エ？チガウヨ。ボクハ、シゴト……………」

何故か黄忠に対してカタコトで喋る劉表。

心なしかいつもの笑みが固い。

「いいじゃない、ちょっとくらい。昔みたいに一緒に鍛練しましょ
う、劉表様？」

「確か、紫苑は蜀に来る前は劉表の元におったと言っておったの
と敵顔が言う。

「い、いや、僕はもう現役から引退したからね。もう、昔みたくお
相手できないよ、“黄忠さん”」

とジリジリと近づくと黄忠に劉表は言うが……………。

「あらあら。大丈夫よ。“ちょっと”だけだから」
笑顔のまま近づくと黄忠。

「い、い……………いやああ！……！」

劉表。唯一の弱点……………黄忠。

その理由は……………またの機会としよう。

24話 苦手なもの(後書き)

ふう〜。なんとか間に合った。

あ、でも明日は無理かも……………。

でも土日は頑張るかも……………。

ご意見、ご感想お待ちしております。

「カツ。全く、相も変わらず気に食わねえ女だな、テメエは」

「あらあら。先ほどの可愛らしい口調はどうされたのですか、劉表様？」

「ハツ。テメエ相手に素面貫くほど俺はテメエを好いてねえよ、黄忠」

人払いをして、黄忠と個人サツで話す劉表。

「それは悲しいですわね。私は憎からず思っていますわよ？」

「カツカツカツ。……笑えねえ冗談だ」

劉表は鋭く、黄忠を見る。

「それで何か、用があるんじゃないかねえのかよ、黄忠」

懐から煙管を取り出す劉表。

「……まだ、それをお持ちでしたのね」

「カツ。未練がましいのは知ってんよ。だがな、これだけは手離さねえよ。多くを失った俺だがな、これだけは手離さねえ」

そう誓ったんだよ、と劉表は煙管を吹かせる。

その煙は心なしに甘いような気がした。

「劉表様。どちらが本当の貴方になるのでしょうかね？」

失ったものを惜しむ劉表ほくと何を失っても歩みを止めなかった劉表おれ。

「カツ。決まったらあ……両方とも、だ。葛藤ってやつだ。いや、矛盾か。ふん、どちらでも構やしねえよ」

「ふふ、それを聞いて安心しましたわ。孫堅さんが亡くなって自暴自棄になられたのかと思ってましたが、そうではないようですし……」

「カツ、分からねえぜ？今の俺こそ自暴自棄かもしれねえぜ？」

「ふふふ。大丈夫ですわ。新しい目標を見つけた貴方はそんなことはしませんわ」

「……………カッ」

劉表はまた煙管を吹かせる。

「知ったような口ぶりは俺の専売特許だ、取るんじゃねえよ」

「あらあら。それは失礼しました」

「ふん」

薄く笑う黄忠に劉表は鼻を鳴らす。

「さて、そろそろ戻るか」

と劉表が戻ろうとすると、急に腕を引かれ、黄忠に抱き寄せられ、胸に顔を埋めさせられる。

「劉表様、何故貴方はそこまで孫堅さんに囚われているのですか？私では代わりになりませんか？」

と黄忠はまるで母のように包み込むような慈愛に満ちた声で呟く。

それは長く、孤独に、己の全てを犠牲にして、どのような誹謗中傷も受け続けた男には甘美な呟き。

その呟きは安らぎ、安息。

それに身を委ねれば男は救われるだろうか？少なくとも幾分は軽くなるだろう。

「
だが、それでも俺は止まらねえよ」

劉表は突き放すように黄忠から離れる。

「俺はテメエのそう言うところが苦手なんだよ。俺には安息なんて似合わねえんだよ」

外道はただ戦場で死ぬのみだ、とそれだけ吐き捨てると劉表はその場から去る。

その背中には今は無き、“悪”の外套が靡く幻影が見えた。

「全く頑固な人ね。大きな子どもみたい……………いえ、実際、劉表様はあの時から時が止まっているのかもしれないわね。心が成長を拒んでいるかのように……………」

黄忠は劉表の背中を見ながら呟くのだった。

「心様……………」

「……………黄射、少し一人にしてくれるかい？」

川の流れる畔に劉表は座っていた。

後ろから黄射が声をかけると劉表はそう言ったのだった。

しかし黄射はそれを無視して、劉表の背中に近づく。

「……………聞こえなかったのか、俺は一人にしろって言ったんだ」

劉表は久し振りに黄射に対してこの口調を使った。

「それは出来ません、心様」

後ろに控えた黄射が言う。

「心様を守るのが私の仕事ですから」

「そいつは贖罪か？」

黄射の父、黄祖が劉表の意に反して孫堅を討ち取ったことへの罪悪。そしてそれへの贖罪から黄射は劉表への絶対の忠誠として首輪を付けていた。

「はい、初めはそうでした。ですが今は……………」

私の意思です、と黄射は言う。

「カツ。下らねえよ。憧れも羨望も恐れも畏怖も、何もかも人の感情ってやつは下らねえんだよ」

それは黄射への言葉か、それとも自分へか……………。

「だが、その自分の気持ちを他人に擦り付け^{なす}る考えは嫌いじゃねえな」

「つまり頼られるのは悪くない気持ちだ、と……………」

まるで劉表の気持ちを代弁するかのよう^に黄射は言う。

この口調の劉表の言葉には棘があるのではなく“裏”がある。それを見抜けるものは少ない。劉表と長い時間を共にした黄射などでも全ては分からない。

例外があるとするならば……………孫堅だろうか。

「ハッ。勝手に解釈してろ」

それに劉表は“正解”だと答えるのだった。

「了解しました。勝手に解釈させていただきます」

と黄射は劉表の背につき従う。

「……………心様」

暫く、ただ川の水面を眺めていた劉表に頃合いを見計らい、黄射が話しかける。

「うん？なんだい、黄射？」

口調は戻っていた。

「その、心様は私を何故お側に置いておられるのですか？」

「……………それは僕が君を評価しているからだよ」

劉表は川に小石を投げて、波紋をつくる。

「僕はその人の能力を見て判断する。逆に言えば能力しか見てないってことだね」

あはっ、と笑い声が聞こえた。だが、黄射からは劉表の表情は見え

なかった。

「だから君が気にやむことはないんだけどね、別に。僕は君に父親の責を求めないし、そもそも、黄祖ちゃんに責があるとも思っていないんだよ」

あれは僕の責だ、と劉表は言う。

「黄祖ちゃんを選んで配置したのは僕だし、それを僕は間違いだっただとは思っていない。ただ、そう運が悪かった。いや、違うか………元々決まっていたんだよ。黄祖ちゃんは孫堅ちゃんを倒すのは決まり事だったのさ。そして僕が孫堅ちゃんに真名を預けることも呼ぶことも出来ないことも、全て定められた予定調和なのさ」

水面の波紋が次第に消えていく。

「決まり事がただただ過ぎた、それだけさ。気に止めることじゃないだろう？」

劉表はそう言って黄射に振り返り、笑う。

それは底の知れない笑みだった。

25話 とある旧臣との会話（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

26話 一縷の望み（前書き）

どうも、土日頑張れなかった者、目目連です。

言い訳をさせていただければ、29日に極道で花嫁なゲームが……
…いや、何でもないんです。

別に風の声の人がお姉ちゃんキャラだと聞いて惹かれたわけでは……
……。

いや、本当すみません。

それでは本編どうぞ。

26話 一縷の望み

呉の軍が赤壁へ移動を開始する当日。

劉表は門の上に座っていた。

その目が見ているのは赤壁か、それともその後か………。

「心、見送りかしら？」

「やあ、孫策ちゃん。まあ、そんなところだね」

劉表は後ろから来た孫策に笑顔で返す。

「頑張つてね、と言うのはどうなのだろうと思うんだよね、僕は。だって君らは頑張ってるんだもの。頑張ってる人に頑張つてと言うのはいかなものかと思うのさ」

「なら、心は何て言って私たちを送り出してくれるのかしら？」

「あはっ。そうだね、僕なら」

またね。

と劉表は笑った。

そして、呉が先に陣を築いていた蜀と合流してから数日後。陣内には黄蓋の離反の報が満ちた。

「お目通り感謝するぞ、曹操殿」

離反した黄蓋は曹操の下を訪れていた。

「初めからその対応で願いたかったわね」

「くく、ちと血が騒いでしまったの」

黄蓋が曹操の陣に訪れた際、ひと悶着あったのだ。

「それで呉の宿将が私に何のようかしら？」

謁見の間には魏の武将たちが揃い踏みだった。

その場に黄蓋と小さな少女が真ん中に立っていた。

「なに、ちと儂を軍に入れてもらいたくての……」

「なッ!?何を言っているのだ、貴様は!?!」

その言葉には広間に集まる一同が目を開く。

その中、曹操の口元には笑みを浮かべていた。

「へえ。貴女は孫堅の時代から呉に仕えている宿将よね?その宿将が何故、今になって我が軍門に降ろうと?」

「我が友、孫文台の志した呉は最早在らず!」

黄蓋と周瑜が仲違いをしたと言う報は曹操の下に届いていた。

だが、それだけでは曹操は信じはしないだろう。

黄蓋もそれを知りながらも、己の命を賭してこの場にいるのだ。

「あははっ。その企て、僕も混ぜてもらおうかな?」

その時、まるでタイミングを見計らったかのように、広間へ入って

くる者が居た。

『 ツ!?!? 』

一同がそれに驚く。

そこには……………。

「やあやあ、曹操ちゃん、お久しぶりだね。あはっ」

劉表が四人の侍女を連れて現れたのだった。

「貴方……………劉表?随分と雰囲気が違うわね」

「あはっ。なんだい?君が僕の口調がわざとらしいって言ったんじゃないかい?」

「それでそのふざけた口調かしら?」

「あははっ。そうかい?でもこれが僕の“素に近い”んだよ?」

と劉表は友好的に笑うのだった。

「それで貴方も私の元に来ると?」

「話が早くて助かるよ、曹操ちゃん」

「前は断つたくせに虫のいい話ね」

「うん?前と今とでは状況が違うだろ?前は我が地に居なかったが、

今は居るだろ？その違いさ」

「ふん。まあいいわ。黄蓋と劉表の我が軍への参列を許可しましよ
う」

「華琳様！？」

その言葉を聞き、軍師筆頭荀イクが声を上げる。

「華琳様、こんなやつらを信用するおつもりですか！？」

「桂花、私は別に劉表たちを信用したわけではないのよ。もし劉表
たちが何かを企んでいるのであれば、それすら飲み込み勝利を手
に入れる。それが我が霸道よ」

と不敵に笑う曹操。その威厳は正に霸王だった。

「さて、面白くなってきたね」

劉表は天幕の中で笑う。

「心様、何故曹操殿の軍門に降ったのですか？」

黄射が横に控えて言う。張允たちも同じように控えていた。

基本的に劉表は己の頭の中で策を組み、誰にも話さない。

「うん？まあ、本当は孫策ちゃんたちが大陸を平定したら横から貰っちゃうつもりだったけど、どうやら駄目みたいだからね。それなら曹操ちゃんから江東の統治権を貰うのもいいかなあ、ってね」

劉表は笑ってそう言った。

「……………さて。鼠ちゃんは何行ったかな？」

「はい、心様」

と張允が答える。

「ふはつ。疲れるなあ、やっぱり。まあ監視されるのは慣れてるけどねえ」

孫策の所でも半監禁状態の時も監視はされていた。

「……………心様」

「黄射？まだ何かあるのかい？」

「何故、それほどまでに……………いえ」

黄射は言葉を途切る。

「……………神樂かぐらです」

『は？』

劉表を始め、黄射を除く三人娘が疑問な顔を浮かべる。

「我が名は黄射。真名は神樂です。この真名、お受け取り下さい」

膝をつき、手を合わせ、臣下の礼を示す黄射。

それを見て、三人は顔を見合せ、黄射に倣うように膝をつく。

「我が名は張允。真名を雫しづ」

「我が名は禰衡。真名は天そら」

「我が名は祭瑠。真名は鈴すず」

『この真名、お受け取り下さい』

黄射同様に臣下の礼を示す。

「……………何の真似か？」

劉表の顔から表情が消える。

口調にも抑揚も消える。

まるで能面、人形のような雰囲気。

「我らは貴方に付き従います」

「貴方の為に尽くします」

「この身は貴方だけの為に」

「如何なるご命令も遂行いたしましょう」

「例えのこの命が朽ちようとも」

「この腕かひながもげようとも」

「この目が潰れようとも」

「この足が折れようとも」

『我が命は貴方の為に……………』

「ハッ。なんだ、それは……………」

抑揚がない口調。これがこの男の素なのか……………。

「だが、それも中々と悪くない」

そして薄く笑う男。

「まあ、でもそれはこの件が終わってからにしようかな。あはっ」

そしてまた抑揚が戻り、友好的な笑みを浮かべる劉表。

劉表は煙管を取り出し、それをくわえる。

「この戦いの後に呼ぶことにするよ。あははっ。これってなんだか死亡フラグっぽいけど、それもまた悪くない」

と煙管を吹かさなのまま懐へしまう。

「あ、心様。煙管は左胸にしまわれては？」

「うん？あははっ、そうだね。そうしておこうかな」

黄射に言われた通りに左胸にしまう劉表。

「一縷の望みを込めて……」。

26話 一縷の望み（後書き）

後、五話もないなんて言いましたが、これで五話目でした。何気に書けました。

そして次がラストです。

ご意見、ご感想お待ちしております。

27話 悪は散り逝く(前書き)

うん？何だ、これは……？

27話 悪は散り逝く

魏が蜀呉と接敵し、そして風向きが変わった時、黄蓋が火を放ち、魏の大船団は火の海に包まれる。

黄蓋の火計により形勢は逆転した。

……だが、黄蓋の部隊は味方から離れている上に火の中に居た。

「くつ。出来れば策殿が治めた天下を見たかったの……………」

黄蓋は肩に刺さった矢を押さえながらそう呟く。

目の先には弓を絞る夏侯淵の姿が映る。

「……………堅殿。今、そちらに行くぞ……………」

黄蓋は覚悟を決め、目を瞑る。目の内には孫策^{こども}たちが笑う未来を夢見て……………。

「あはつ。感慨に浸っていると悪いんだけどさ。邪魔させてもらつ
よ」

その軽薄な声と共に目の前を何かが覆う。

それが『悪』の一字が縫われた外套だと気付くのは少し後だった。

「やあ、黄蓋ちゃん奇遇だね?」

悪の外套をひるがえ翻し、劉表は黄蓋に笑いかけた。

「なに、を戯けた、ことを……………」

どうやら劉表の軽口に返している余裕がなさそうだった。

「……………祭瑠、禰衡。黄蓋ちゃんを連れて孫策ちゃんの所まで下がってくる?」

それを劉表も察したのかそれ以上は何も言わずに黄蓋に背を向ける。

「お主、何を……………」

黄蓋が劉表にそう問おうと手を伸ばしかけるがそれが届くことはなかった。

「祭瑠、そつち持って!」

「チツ。余計な脂肪をぶら下げてるから重いのよ」

両肩を祭瑠たちに掴まれ、その場から脱する黄蓋。

因みに劉表侍女部隊の双丘は皆控えめである。

「あははっ。呉は発育が良いからね。外れた者の恨みは怖いよね。そうは思わないかい、夏侯淵ちゃん？」

と劉表は相変わらず笑顔で対峙する。

「劉表……。やはり貴様もこれが狙いだっただのか……」

「うん？違うよ。言っただろ？僕はただこの企てに混ぜてもらっただけさ」

そう言っただけでビュンツと馬鞭を振るう劉表。

「さて、僕は僕の目的を果たさせてもらっただけかな」

「させると思っているのかッ!!」

絞っていた弓を劉表へ向け、標準を合わせる。

「あははっ。別に君らの許可は求めてないよ、夏侯淵ちゃん。それに 夏侯惇ちゃん」

劉表がスツと後ろに下がると今まで立っていた場所に大剣が刺さる。

「劉表！逃がさぬぞ！」

「姉者!？」

黄蓋の対応が夏侯淵だったのと同じように劉表の対応は夏侯惇だった。

「すまない、秋蘭。途中で見失ってしまっ……」

「いや、構わないよ。私も黄蓋を取り逃がしてしまったしな」

「そうか。なら二人で劉表を止めることにしよう」

「ああ」

と劉表の方へ目を向けると……。

ニヤリ。

劉表の口の端がつり上がる。それは嫌らしい笑みだった。

「あはっ。……………黄射、調印」

『はっ。ここに……………』

「二人を止める。“俺”は用がある」

二人が得物を取り出す。

「ふん。ではな、小娘ども」

悪の外套を翻し、夏侯惇たちに背を向ける劉表。

「待て、劉表　　ッ!？」

それを追おうとした夏侯惇の目の前に大剣が刺さる。

「追わせるとでも思っているのですか？」

その前に黄射が立ち塞がる。

「カツカツカツ。魏の精鋭？聞いて呆れるわ！」

劉表は火の海の中を笑みを浮かべて歩く。

その前には魏の兵が立ちはだかるが、止めるには到らなかった。

それは決して魏の兵が弱いわけではない。そして劉表が強いわけでもない。

その証拠に兵の剣は劉表の身に届いているし、矢も劉表の元に届いていた。

だが、劉表を止めるには到っていないのである。

「はあああー！」

魏の兵が劉表に斬りかかる。

「ぐうッ！」

それが劉表の腕に“刺さる”

「……………カツ、甘えな。切り抜く気概がねえ、そして腕もねえ」

剣は劉表の腕に刺さったまま抜けない。

「腕のねえ剣なんかはよお、ただの鉄屑だ、この駄阿呆がぁ!!！」

そして魏の兵を蹴り飛ばす劉表。

「放つて!!」

次には矢の雨が劉表へ降り注ぐ。

「……………カツ」

それを一笑すると、急所だけを庇う劉表。

「ぐっ」

そして矢の雨を真っ向から受ける劉表。

ニヤリ。

それでも劉表の歩みは止められない。

矢をへし折る劉表。

「まだまだ甘えと言ってるんだよ！」

「ば、化物か……………」

血が滴りながらもその歩みを止めない劉表にいくら魏の精鋭と言えども畏怖を覚える。

「化物？ 違えな、俺は 外道だ」

劉表はニヤリと笑う。

「う、うわあああ！！」

一人の槍兵が劉表の狂気に障り、突出する。

そして劉表に向けて槍が迫る。

それを劉表は避けもしない、いや既に避けるだけの体力は残されていないだけかもしれない。

ズブリ。

槍は劉表を突き刺す。

そして劉表は……………。

「カッ」

笑うのだった。それは正に狂った笑み。

「急所から外れてんだよ、餓鬼が！」

劉表は槍兵を殴り飛ばす。

そして槍の柄の部分だけを折る。刃の部分は体内に残したままだ。

それが正解であった。もし不用意に抜こうものならそこから血が溢れ出ただろう。

それでも隙間から血が垂れ流している。

「餓鬼どもに用はねえんだよ」

劉表が凄むと兵たちが後退る。

「なら私ならいいのかしら？」

そこに現れたのは霸王だった。

ニヤリ。

「カッカッカッ。やっとお出ましか、小娘」

劉表は曹操を見るとまた笑う。

それが狂気による笑いか、それとも……………。

「随分と酷い様じゃない、劉表」

「カツカツカツ。否だな、それは。これが俺の本来あるべき姿だ」

「外道には似合いだと？」

「そうだ。俺は外れた者だからな……………」

劉表と曹操の眼光がぶつかり合う。

「それで貴方はここに何をしに来たのかしら？まさか私にその姿を見せに来たのかしら？」

「カツカツカツ。なんだそれは？笑えねえな。決まってるだろ。テメエの首を取りに来たのさ」

ニヤリと笑う劉表。

「その姿で？」

曹操は鎌を持つ。

「当然だろ？」

と馬鞭を振るう劉表。

「そんなもので私の首を取ろうとした者は過去貴方が初めてよ」

「カツ。たかが小娘相手に刃物なんて必要ねえよ。この腕一本で十分だ」

ニヤリと笑う劉表。

「そう。ならそうすればいいわ。私は」

「手心を加えるってんならその喉元に食らい付くぞ、小娘」

「ッ」

曹操が息を飲む。

自分の手が震えているのが分かった。

この手負いの男に自分は恐れを抱いている。

「……………これが眠っていた獣ってわけね」

鎌を握り締める曹操。

ここで狩らなければ、自分が狩られると本能がそう告げていた。

結果は目に見えていた。

「これで満足かしら？」

劉表の首に鎌を当て、曹操は言う。

明らかにこちらが優勢だということにも関わらず、曹操から危機感は消えてはいなかった。

「ああ、上出来だ、小娘」

体はもうボロボロだということにも関わらず、眼だけが未だに死んでいなかった。

いや、初めから死んでいたのかもしれない。

「貴方、初めから死ぬつもりでここに来たわね」

「……………知らねえな。さっきも言ったが俺はテムエの首を狙ってきたんだよ」

「いつまで外道を続けるつもり？」

「カツ。そいつは分かってんだろ？」

「死ぬまでだ」

「……………そう。惜しいわね」

そして曹操は鎌に力を入れる。

「ああ、そうだ。一つだけいいか？」

「何？命乞いなら聞くわよ？」

「カッカッカッ。……………一つ、言伝てを頼まれてくれ、“曹操”」

「……………何かしら？」

「孫策に会ったら、言っておいてくれ。俺はデメエが
だったぜ」

×
×

「ええ、分かったわ」

「なら良い。……………曹操、世話あ掛けたな」

「……………別に」

そして曹操は鎌に力を入れ、振り抜く。

「……………母様。全て終わったわよ」

孫策が孫堅の墓の前でそう呟く。

「赤壁でね、祭が命懸けで成功させてくれた火計のお陰でね、曹操は引いたわ。それから平地での決戦で曹操たちを破ったわ。それで劉備と私、そして曹操の三人で大陸を分けたのよ」

天下は三分となり大陸に泰平の世が来たのだった。

「母様の描いた宿願とは違つかもしれないけど、皆笑ってるんだから許してくれるわよね？」

と孫策は笑みを浮かべて孫堅の墓を見るのだった。

そして孫策は横に目をずらす。

そこには真新しい墓石が並んでいた。

「……………全く。何勝手してんのよ、アンタは」

とコツツと墓石を小突く孫策。

カツカツカツ。他人の墓は労りやがれ。

そんな幻聴が聞こえた気がした。

「何が、またね……………よ」

それは再会を示す言葉ではあるが、別れの時に使う言葉であることも事実であった。

「本当に訳が分からないわよ、アンタは……」

劉表。孫策にとっては最初は親の仇であった。その後、袁術の下で同じ客将をしていた。その人を喰ったような性格は孫策の神経を逆撫でしていた。だが、何かと気にかけて素振りを見せる劉表に孫策は疑問を抱くと同時に興味を持っていた。

そして袁術から江東を取り返した時、建業を制圧した劉表。孫策は正直、驚いていた。口ではああは言うが劉表は一度も私たちに敵意を見せたことはなかったからだ。勿論、火の粉が降りかかれば払いはしたが自分から動くことはなかった。初め、孫策は自分たちを油断させるための策だと思っていた。だが、それは違っていた。建業に来て、思った。勝つ気はあるのかと……。明らかに人数が少ない。それなのに籠城するつもりもなかった。ただそれでも苦戦したのに変わりないが……。

捕らえた劉表は影だった。おそらくは姿を眩ましたのだとそう思った。だが実際は違った。孫堅の墓の前で劉表は孫策を待っていた。ただそこに孫策の知る劉表は居なかったが……。

それから劉表を捕虜とした。自分でも何故、殺さなかったかのか不思議であった。それはもしかすると劉表が孫堅の墓に花を添えていたからかもしれない。

それから劉表と会話することが増えた。前みたいな憎たらしい口調ではなく、友好的な口調であったために話しやすかったのだ。人を

おちよくる性格はそのままだったが……。

そして曹操が呉へ侵攻してきた時、毒矢に射たれた孫策を助けた。それから呉の将たちも劉表への態度が変わった。あの甘寧ですらだ。そして赤壁。まるで帰りを待っているかのような送り方をしながらも、敵の懐に潜り込んでいた。

黄蓋が連れていた少女、鳳統から話を聞いた際、孫策は耳を疑っていた。

だが、黄蓋を火の海から祭瑠と禰衡が連れてきた時、孫策は諦めた。劉表はこの地に来ているのだと、敵地の真ん中で戦っているのだと、それを理解した。

そう。その場で既にもう理解していた。

男が死ぬことを……………。

孫策は祭瑠たちに褒賞を与えと言ったが彼女たちは断った。曰く……………。

「アタシたちは心様に言われただけですから……………」

「そんなことよりその無駄な脂肪を削ぎ落とせ……」

……だった。よくは知らないけれども、祭瑠は周泰と同じ感じがした。

そして彼女たちも知っていたのだろう。劉表が死にに來ていることを……。

だからだろうか四人は劉表の死の報を聞いて、直ぐ様自害した。劉表の墓の横に四つの墓がある。勿論、彼女たちのものだ。

あんな男でも、……いや、誰にだって慕ってくれる人はいるものだ。あの男がそれを知っていたのだろうか。きっと知っていたに決まっている。あの見透かしたような男のことだから。

それにしてもあの男は他人の真名を一切呼ぼうとはしなかった。

孫策も周瑜も真名は許していたが、結局最後まで呼ぶことはなかった。

「……全く。最後まで不器用な男ね、アンタは」

と孫策は劉表の墓の前に座る。

「そんなに母様の方がいいのかしら……………」

チラリと孫堅の墓を見やる。

「……………はあ。まあいいわ。アンタはそこで私たちが楽しく暮らすのを指をくわえて見てればいいのよ。アンタが悔しむくらい楽しんでやるんだから」

孫策は懐から髑髏を模した煙管を取り出し、劉表の墓の前に置く。

そして立ち上がるとその場を後にする。

“ ”

すると笑い声が聞こえた。

それは豪快な笑いか、友好的な笑いか、それとも薄い笑いか……………。

孫策は立ち止まる。だが振り向きはしなかった。

「……………私だって、アンタのこと　　××だったわよ」

そうして一筋だけ雫を落とし、今度こそ、前へと歩き出す孫策。

こうして大陸には平和が訪れた。

だがそこには人を喰ったような性格をした男は居なかった。

廻話 廻(めぐ)る物語

「くはあ………」

男は欠伸をして起き上がる。

そして男が起きて、初めて見る風景は、見慣れた玉座の間だった。

その玉座に座り、男はうたた寝をしていたようだ。

男は後ろを振り返り、ため息を吐く。

そこには“真新しい”悪の旗が飾ってあった。

それもその筈、これは“つい先日”男の思い付きで作らせたものなのだから。

「はあ……………」

男は再びため息を吐き、もうすぐ来るであろう来客者を待ち、扉を見やる。

それと同時に扉が開き、来客者が来る。

「劉表様、父上……………黄祖殿が孫堅を討ち取りました」

そう言ったのは来客者　黄射だった。いくぶんか若いような気がする。

「ああ、そうか。分かった。下がっていいぞ」

男はそう気だるそうに答える。

「あの、劉表様？どうかなさいましたか？」

「ああん？何がだ？」

「い、いえ……………失礼しました」

男が凄むと黄射はそう言つてと下がっていった。

「はあ。またここからか……………」

男は抑揚なく呟く。

男　劉表は転生者ではない、だが生まれ変わりを繰り返している。ただし、転じるわけではなく廻っている。転生でなく廻生だった。ずっと劉表としてこの世界を廻っている。

劉表という脇役をずっと演じ続けていた。

その廻る外史には天の御使い、北郷一刀が居たこともあった。だがその在り方は様々だった。

劉備の立ち位置であったり、魏に降りたり、蜀に降りたり、呉に降りたり、勿論、“今さっき”までいた外史のように降りないパターンもあった。

劉表はその時に接触し、暇潰しに……いや、最初はこの廻生くわいせうから抜け出す為に未来の知識を覚えたが、それが役に立つことはなかった。

ならばと劉表自身が三国を統一するのも面白いと何度か挑戦したが、それが一度として成功した試しはなかった。

所詮は脇役。劉表は永遠と劉表という脇役を演じ続けなければいけないかった。

「生まれてからずっと劉表で、そしてこれからも劉表で在り続ける、か………」

劉表は自分の言葉を自嘲気味に笑う。

「ふん……………」

劉表は隣に架けていた外套を手に取り、羽織る。

“悪”の一字が禍々しく縫い付けられたそれが靡く。

「廻るなら、孫堅の生きている時代から廻れよ」

劉表が廻生するのは決まって孫堅の死んだ後だった。

「始めに呼ぶのは孫堅の真名がいい。……………さあ、また始めるとするか。今回はどこに与するか……………」

薄く笑う劉表。

そしてそれは引っ込み、悪どい笑みが表に出る。

「カツ。今回はどんなキャラを演じるか」

永遠の脇役、永久の背景……………今回も劉表は演じる。もう何十回、何百回、何千回と繰り返されたことを。

廻る物語は今日も止まらず廻り続ける。

廻話 廻(めぐ)る物語(後書き)

と言うわけで、『その悪を背負う者は……』は完結です。

こんな感じですが、いかがでしたか？

転生者でなく廻生者。無理がありますか？

まあ、解釈は人それぞれ。そして作者は未熟者。批評には甘んじて受ける覚悟です。

伏線としては孫堅の墓の前で言った一言と毒矢の時の一言。こちらにそうなっているつもりです。

ええ、最後になりますが、作者の迷走にお付き合いいただき実に感謝いたします。

それでは今後につきましてはユーザーページの活動報告にてありますので、お暇でしたらお越し下さい。

それではまたご縁があれば……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9290p/>

その悪を背負う者は.....

2011年2月1日20時22分発行